(3) 駒場小谷館（こまばこやだて）

目　　次

Ⅰ　位置と周辺の遺跡（中世）……227
　１．位置と立地……227
　２．周辺の遺跡……229
Ⅱ　遺跡の状況……233
Ⅲ　調査の成果……239
　１．発見された遺構……239
　　主　郭……239
　　副　郭……251
　２．出土遺物と年代……261
　　陶磁器……261
　　磁　器……262
　　白磁皿……262
　　日本産磁器……263
　　石　臼……263
Ⅳ　館跡について……266
　１．遺構について……266
　　形態と規模……266
　　掘立柱建物跡……266
　　土　壙……267
　　溝……268
　２．遺構の年代……268
　　土　壙……268
　　溝……270
　　土　塁……270
　３．館跡の構造……271
　　立　地……271
　　平場の配置……272

Ⅴ　歴史的環境……273
　１．文　献……274
　　ａ．館跡に関する江戸時代の記録と伝承……274
　　ｂ．黒川郡北迫の中世の記録……275
　２．館主について ……276

調 査 要 項

遺 跡 所 在 地　：　黒川郡大衡村駒場字中里
調　査　主　体　：　宮城県教育委員会、日本道路公団
調　査　期　間　：　昭和48年10月15日～49年３月30日
調　査　面　積　：　8,500㎡
発　掘　面　積　：　4,300㎡
遺　跡　記　号　：　ＡＭ
調　査　担　当　：　宮城県教育庁文化財保護課
　　藤沼邦彦、白鳥良一、小井川和夫、阿部恵
　　熊谷幹男、柳田俊雄、中島直、田中則和
調査協力機関　：　大衡村教育委員会
協力・参加者　：　門間俊彦（東北学院大学学生）
　　佐藤正人（　　〃　　）
　　佐藤房枝（　　〃　　）
　　柳瀬和幸（東北大学学生）
　　大衡村教育委員会

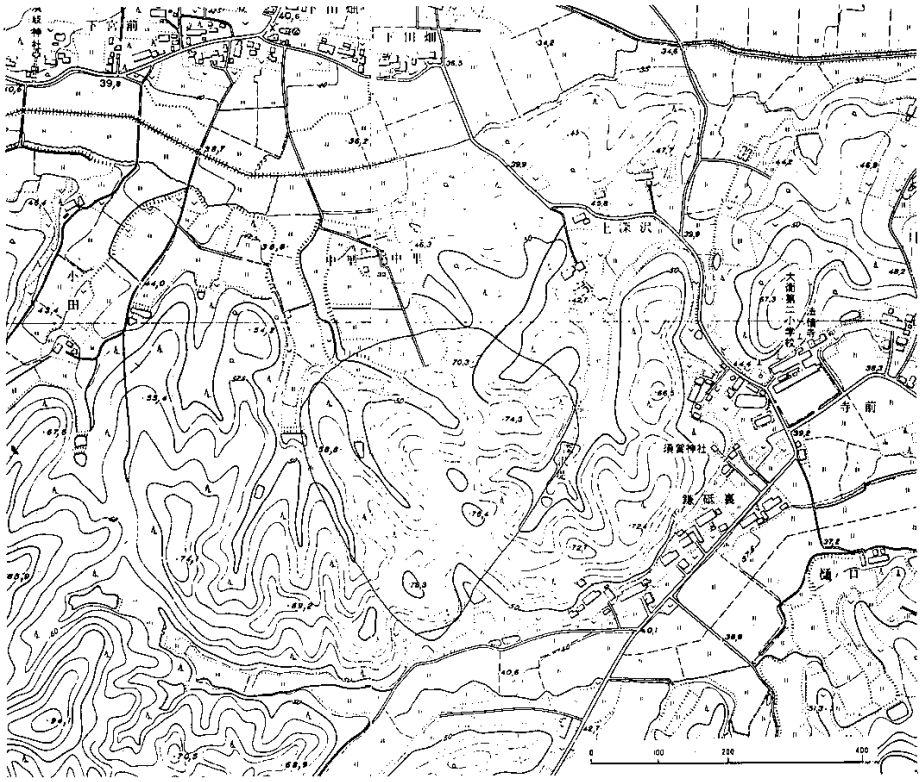
Ⅰ．位置と周辺の遺跡（中世）

１．位置と立地

遺跡は黒川郡大衡村駒場字中里に所在し、大衡村の北東部に位置する。

大衡村の北部には奥羽山地帯から東へ大松沢丘陵がのびてきている。この大松沢丘陵は大衡村の北東部で樹枝状になって東と南に派生している。樹枝状に派生した丘陵の中で大衡村古井待地区から東の大原地区に向ってのびていく丘陵がある。この東にのびる丘陵のほぼ中央付近に北東へ派生する小丘陵がある。この北東方向の小丘陵の西側には中里地区から南東に入る沢があり、また、東側には上深沢地区から南西に入る沢がある。丘陵の北側には沖積地が開けており、その中央部を鶴田川が東流し周囲には河岸段丘が発達している。また、丘陵の南側には谷底平地がみられる。

遺跡はこの小丘陵の基部に位置する。この小丘陵基部の地形をみると西側の中里地区から入る沢が北と南に分岐して弯曲しながら東に入りこむ。北に分岐した沢は上深沢から南側に入る



第１図　周辺の地形

桜館
新田
南谷地
小原
斎田
南町
多南
三本木町
中世館
上伊賀
伊賀
駒場
坂平
下田畑
天森
吉光山
大和町
下舞野
1000m
0
1000
2000
3000

第２図　周辺の遺跡

沢に、南に分岐した沢は南側の大森地区から北西に入る沢に接近していく。このため丘陵基部は４つの沢によって囲まれた北東方向の尾根と西方向の尾根に分かれる。館跡はこの北東方向と西方向の丘陵尾根と斜面に立地し、北と南は鞍部によって前後の丘陵と続いていく。

２．周辺の遺跡

本遺跡周辺（大衡、大和、大郷、三本木）の遺跡の分布をみると旧石器時代から近世までの遺跡が数多くみられる。この中で中世～近世にかけての遺跡は館跡・経塚・窯跡・塚などである。本遺跡周辺では沢をはさんだ東側の丘陵上に長楯城、谷底平地をはさんだ南側の丘陵上に猫の森館が立地する。また、遺跡の北側の河岸段丘上にある上深沢遺跡の調査で中世陶器（甕・鉢）や近世の陶磁器類が出土しているが、中世の遺構は確認されていない（1973、丹羽）。

駒場地区の東部、大郷町大松沢地区には鶴田川左岸の丘陵上に大窪館、築館、物見山館が立地し、右岸の丘陵上には鶴館が立地している。また、西部の善川左岸の大衡村塩浪地区から大和町落合地区にかけての丘陵上には大衡城、奥田館、御所館、八谷館などが立地している。

本遺跡の北方の三本木町には鎌倉時代後半とされる多高田窯跡（1978、藤沼）と芦ノロ窯跡などのある三本木古窯跡群が丘陵斜面に立地している。また、鳴瀬川右岸の丘陵上には一部調査を行なった坂本城跡（1972、阿部）、桑折城（1974、小井川）などの中世の館跡が立地し、さらに、経筒の出土した館山経塚（1975、藤沼）などが知られる。

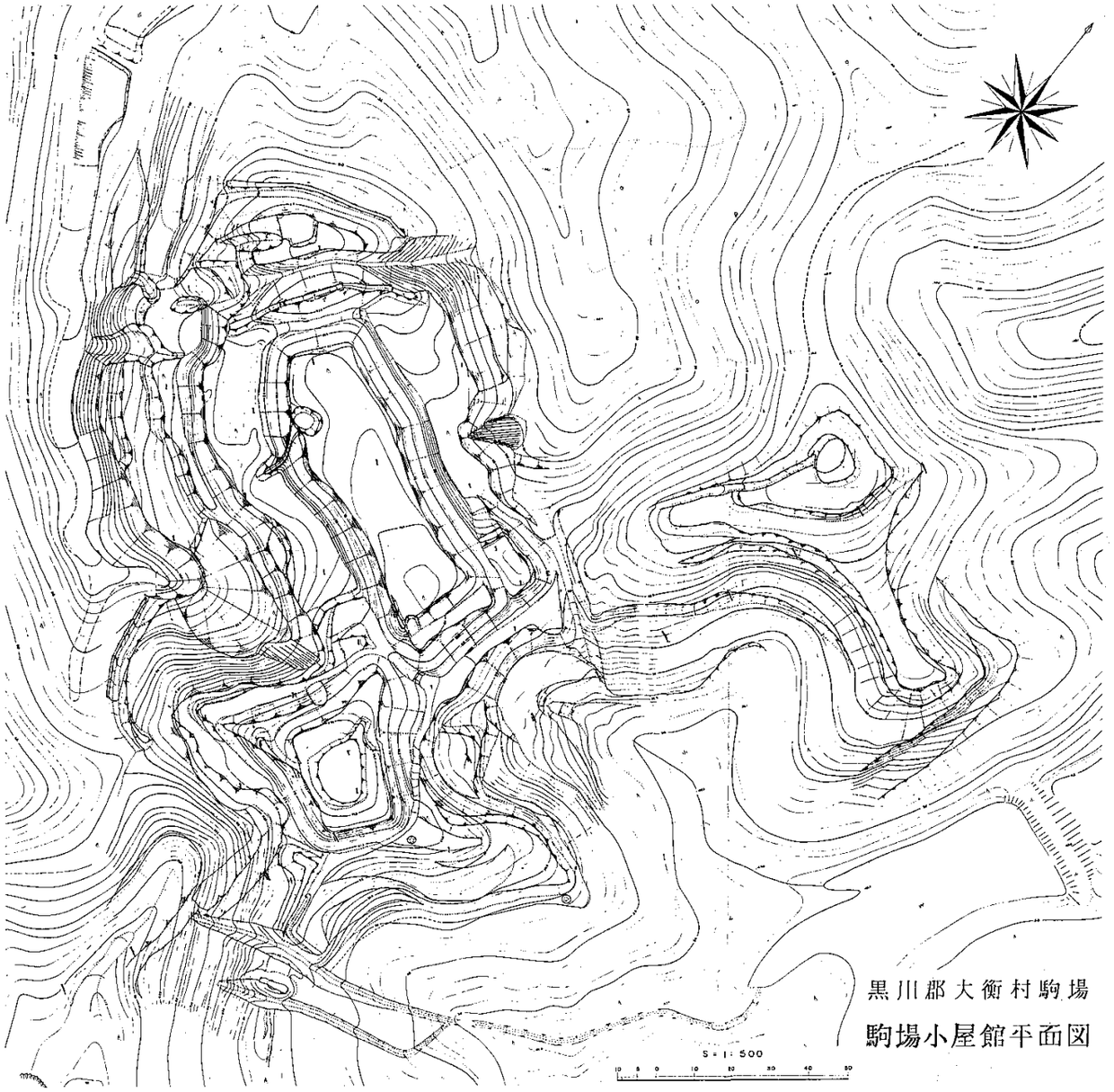
このように善川両岸、鶴田川両岸、鳴瀬川右岸などの丘陵上に館跡が多くみられるほか経塚・窯跡などの発見例も比較的多い。

第１表　遺跡地名表

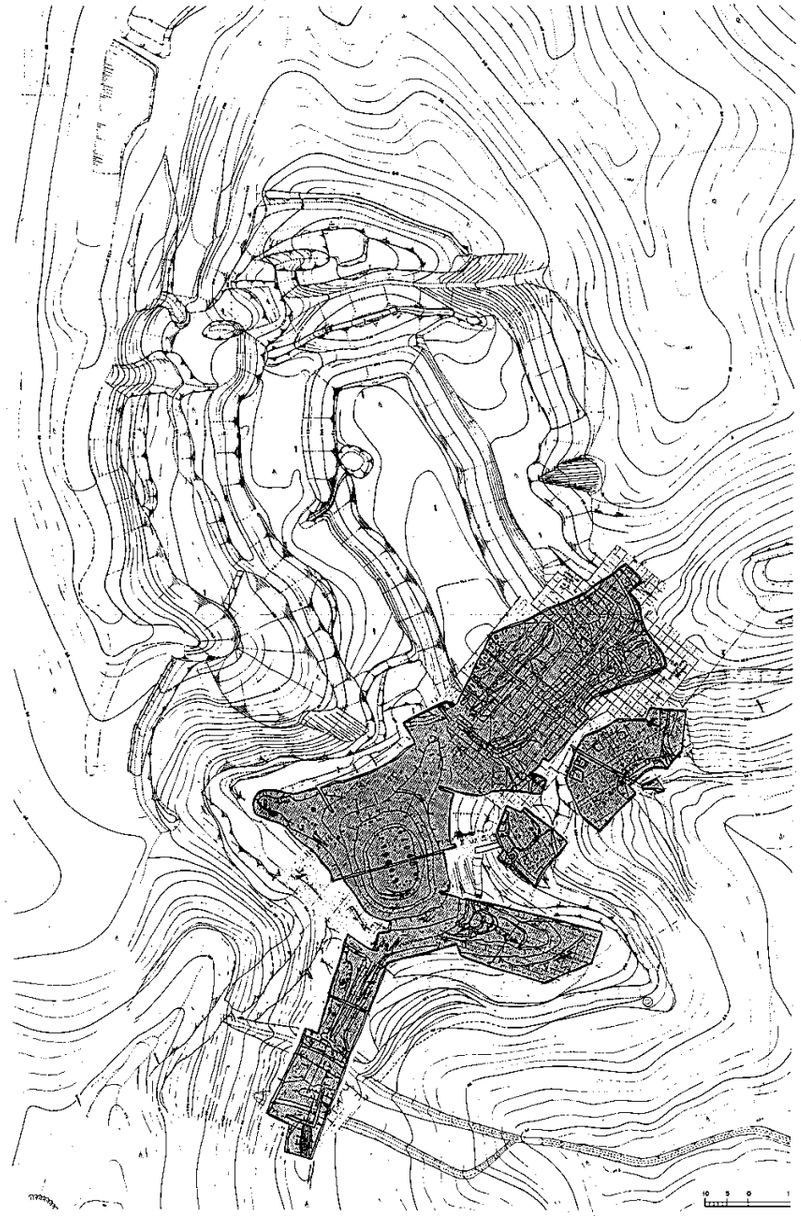
No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	駒場館跡（小屋城跡）	中世	20	彦右ェ門橋遺跡	奈良・平安
2	猫ノ森館跡	〃	21	横前遺跡	〃
3	長楯城跡（打館）	中世・近世	22	吹付B遺跡	〃
4	鎌砥裏遺跡	旧石器・奈良・平安	23	針遺跡	〃
5	海老沢遺跡	縄文(中)	24	萱刈場遺跡	〃
6	上深沢東遺跡	縄文	25	待井沢遺跡	〃
7	上深沢遺跡	縄文(中)	26	河原A遺跡	縄文・奈良・平安
8	坂下遺跡	奈良・平安	27	河原B遺跡	奈良・平安
9	下原川遺跡	平安	28	座府遺跡	〃
10	上原川遺跡	縄文・平安	29	ボード仙台工場南遺跡	平安・中世・近世
11	須岐神社裏遺跡	奈良・平安	30	大衡中学校東遺跡	縄文
12	中里遺跡	縄文	31	柧木D遺跡	〃
13	小田遺跡	〃	32	長原C遺跡	〃
14	小田南遺跡	〃	33	長原B遺跡	〃
15	小田西南遺跡	〃	34	長原A遺跡	〃
16	戸口B遺跡	奈良・平安	35	柧木C遺跡	〃
17	戸口A遺跡	縄文	36	柧木B遺跡	奈良・平安
18	彦右ェ門橋南遺跡	奈良・平安	37	柧木A遺跡	縄文
19	吹付遺跡	〃	38	平林B遺跡	旧石器

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
39	小田切B遺跡	縄文	88	塚越遺跡	奈良・平安
40	小田切A遺跡		89	新坂囲遺跡	縄文(中)
41	梅木遺跡	奈良・平安	90	要害館跡	中世・近世
42	新藤遺跡	縄文・奈良・平安	91	要害遺跡	縄文・弥生・平安
43	蔵遺跡	奈良・平安	92	斎の前遺跡	縄文(中・晩)・平安
44	在家遺跡	縄文	93	竹沢A遺跡	奈良・平安
45	中沢囲遺跡	奈良・平安	94	竹沢B遺跡	〃
46	荒屋敷遺跡	奈良・平安	95	竹沢C遺跡	〃
47	大蛸遺跡	平安	96	桜館遺跡	
48	腰館跡(奥田館跡)	中世	97	斎田野山遺跡	
49	下屋敷遺跡	奈良・平安	98	花見山遺跡	
50	奥田金沢遺跡	縄文(中)・奈良・平安	99	花見山古墳群	古墳
51	熊ノ沢遺跡	縄文	100	音無城跡	安土・桃山
52	五十沢遺跡	縄文・奈良・平安	101	跡不見壇	
53	苗代沢遺跡	〃	102	中沢遺跡	古墳
54	前沢田A遺跡	縄文・平安	103	天王河原遺跡	奈良(後)
55	前沢田B遺跡		104	舟場遺跡	古墳・奈良・平安
56	平林遺跡	縄文・奈良・平安	105	坂本城跡(天神城)	鎌倉
57	八幡神社北遺跡	縄文	106	坂本経塚群	中世
58	八幡神社遺跡	〃	107	坂本館山横穴古墳群	古墳
59	八幡神社南遺跡	〃	108		〃
60	大衡城跡(越路館)	中世	109	青山A遺跡	縄文
61	古城館跡(隠居館)	〃	110	青山B遺跡	古墳
62	寺沢遺跡	奈良・平安	111	坂本A遺跡	縄文
63	要害遺跡	〃	112	坂本C遺跡	〃
64	松本遺跡	縄文・奈良・平安	113	坂本B遺跡	〃
65	松本A遺跡	奈良・平安	114	青山横穴古墳群B群	古墳(後)
66	大衡役場前遺跡	縄文・奈良・平安	115	寺下横穴古墳群	〃
67	金谷遺跡(八志沼遺跡)	縄文(中・後・晩)	116	山畑遺跡	縄文
68	中興寺遺跡	縄文(晩)	117	寺下遺跡	〃
69	安楽院遺跡	縄文(中・後)	118	蟻ヶ袋館跡(高館)	室町
70	吉岡城跡	江戸	119	国史群山畑横穴古墳群	古墳
71	吉岡古館跡	中世	120	混内山横穴古墳群	古墳(後)
72	車遺跡	奈良・平安	121	混内山遺跡	縄文・平安
73	天皇寺遺跡	平安	122	千貫森館跡(伊賀城)	中世
74	一里塚	江戸	123	伊賀一里塚跡	
75	一里塚遺跡	縄文	124	御殿森遺跡	古墳(後)
76	糸繰遺跡	〃	125	芦ノ口山窯跡	中世
77	西涌田遺跡	平安	126	多高田窯跡	鎌倉(後)
78	柴崎遺跡	奈良	127	多高田窯跡	江戸(中・末)
79	古川遺跡	奈良・平安	128	多高田遺跡	縄文
80	信楽寺跡	中世	129	桑折遺跡	奈良・平安
81	御所館跡	〃	130	三本木B遺跡	縄文・奈良・平安
82	八谷館跡	〃	131	七曜塚	安土・桃山
83	新田古墳	古墳	132	三本木山遺跡	縄文(前・中)
84	新田古墳	〃	133	西浦遺跡	奈良・平安
85	八谷古城跡	中世	134	鹿の沢遺跡	縄文
86	上ノ上遺跡	平安	135	八坂神社古墳	古墳
87	熊野遺跡	奈良・平安	136	桑折館跡(鶴館)	近世

3図—①



第3図—②　発掘区



第3図　遺跡地形図

Ⅱ．遺跡の状況

館は西と北東に延びる丘陵の頂部と斜面を利用して構築している。遺構としては平場・空堀・土塁・通路（門）などが観察される。これらは上深沢地区から入る沢と中里地区から入る沢に面した斜面に多く見られる。

この館の西側は西丘陵の斜面にある「西側に土塁を伴なう南北方向の２本の空堀」、北側は北側の鞍部にある「東西方向の空堀」、南側は南側の鞍部にある「東西方向の空堀及びその間にある土塁」で周囲から区画されている。東側は特に区画の遺構は見当らないが、沢が他の３方向に比較して急斜面となっていることで区画施設と同様の役目を果したものと思われる。このように空堀・土塁・沢によって区画される範囲は東西 330m、南北 120mの約 39600 ㎡である。

館の立地する丘陵頂部をみると、西側丘陵の南側から東西に走る空堀（１号空堀）があり、館跡を大きく北西部分と南東部分に区分している。２つに区分された地域には平場・空堀・土塁・通路などの遺構がみられ、自然地形と組合って１つのまとまりのある地域を構成しているといえる。この意味でそれぞれが１つの郭として考えることができる。特に北西の郭は遺構の規模・配置などから本遺跡の主となる郭（主部）、南東の郭は主郭にともなう副郭として考えたい。

主　郭

主郭は「東西に長い上段の平場」とその周囲にある「中・下段の平場」を核として、東側にある「通路状平場」・下段平場西側の「腰郭」・南東斜面にある１～２段の平担部で構成される。

上段平場は東西 70m×南北 20mの東西に長い平担部分でやや西に傾斜している。遺構には、南東辺隅に長さ９m、高さ 50㎝の土塁状の遺構、南東隅と南辺中央西寄りにややくぼんだ部分がある。南辺中央西寄りのくぼみに通路状平場から通じる長さ約５m、幅約３mの土手状の通路が付されている。

中段平場は上段平場の東側にあり上段平場より約３m低い長さ約 24m、幅約４mの平場である。その南隅は上段平場の南東隅のくぼ地に連続していく。

下段平場は上段平場の北、西、南をめぐる１段低い平場である。この平場の北側は上段平場より約５m低い長さ約 80mの平担部であり、西半部の幅が約 18mあるのに対して東半部は幅約７mとせまくなっている。特に東端は１段高くなっており、上段平場との間に幅約２mの堀状の窪地があり、東側の通路状平場からの入口となっている。また、沢に面した部分には幅約３mの土橋状の通路がみられる。平場の西側は上段平場より約４m低く、長さ約 24m・幅２～４mの平担部で北へ傾斜している。平場の西側には高さ約４mの土塁が並行しているため空堀的な様相をしている。南側は上段平場より４～５m低く長さ約 70m、幅約 10mで西へ傾斜してい

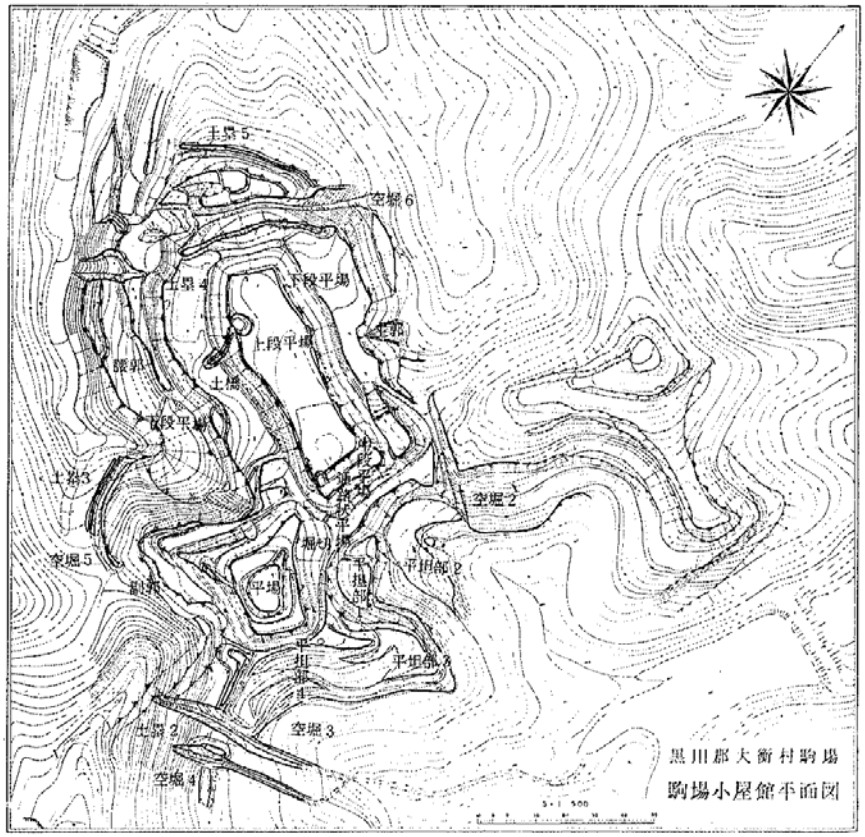
き、東端部に１段高い平場がみられるその東側は副郭に連結する「空堀１」に続く緩斜面となっている。

下段平場西側にある土塁の西には東西方向に４号空堀、５号空堀、３号土塁と並行して走り丘陵を区画している。

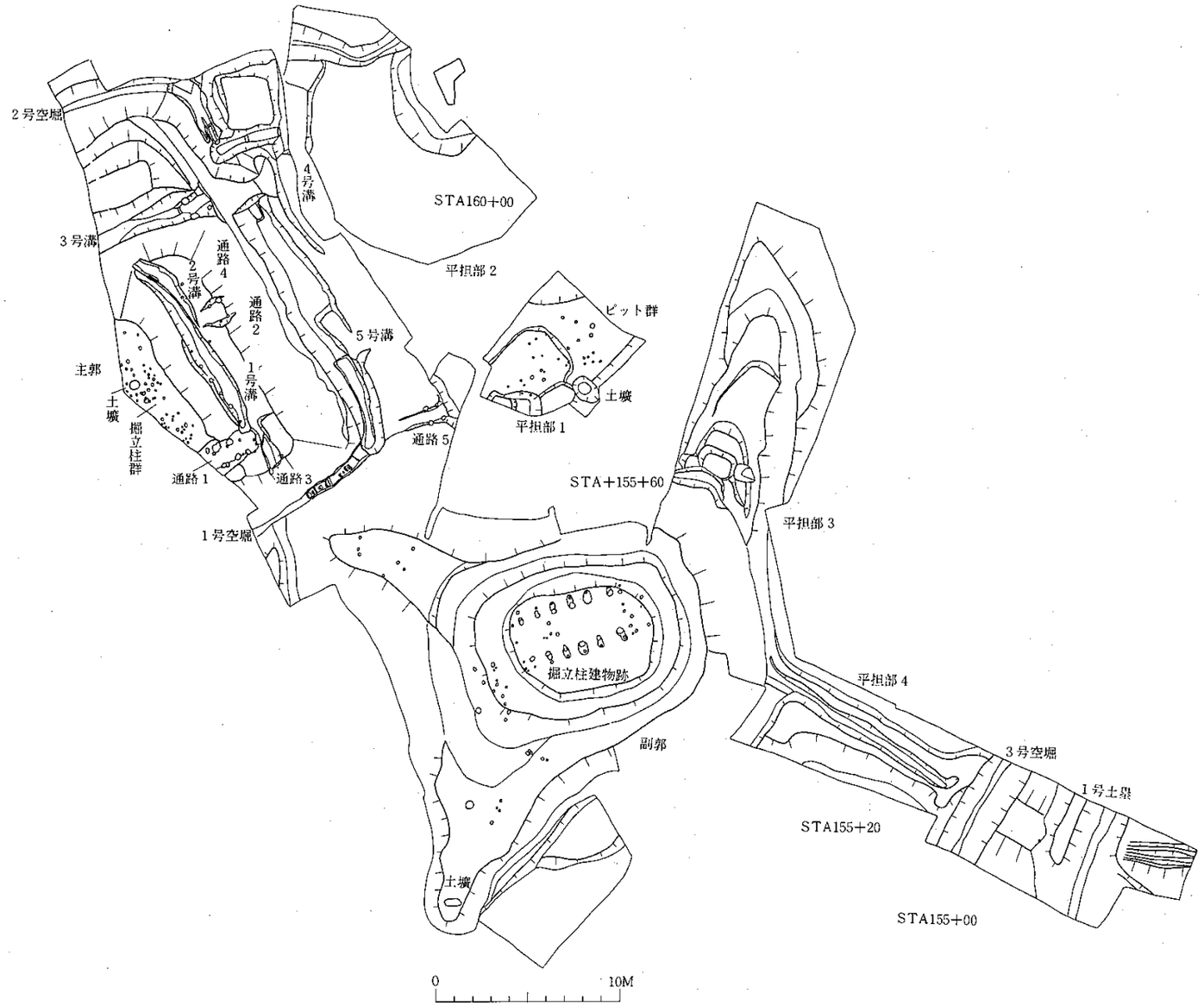
通路状平場は中段平場の東側にあり、中段平場より３ｍ低い南北約 50m、幅約 10m の細長い平場である。この平場は下段平場の東及び副郭へ行く連絡路となっている。北側の丘陵鞍部には東西方向に沢と沢をつなぐように幅約 15mの空堀２が走っている。

副　郭

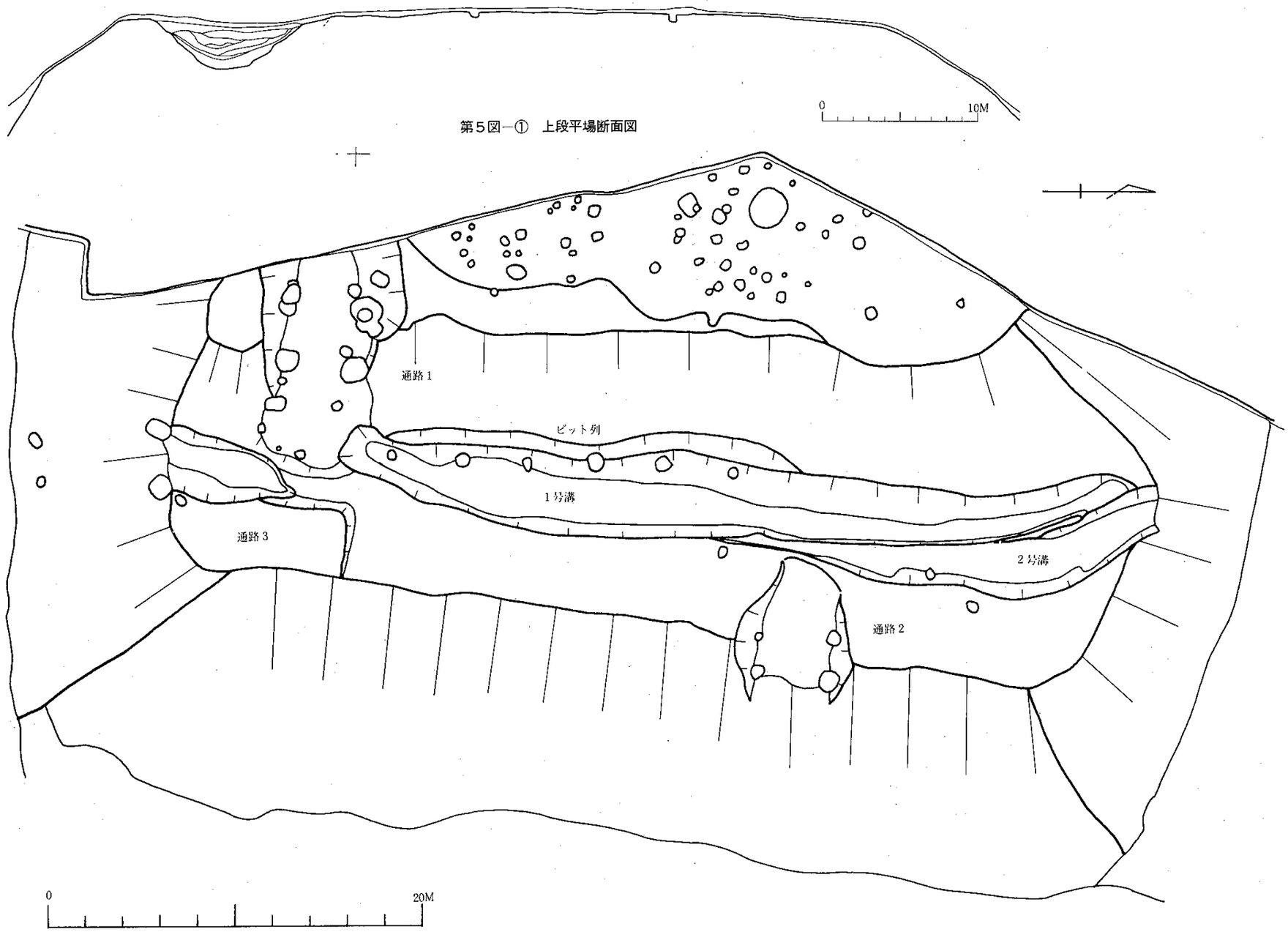
主郭の南東に空堀１をはさんだ丘陵上にある。副郭の頂部は約東西 33m×南北 23mの平担面であり、その周囲に頂部の平場より低い幅２～４ｍの腰郭がめぐる。その比高は２ｍである。



第４図　館跡略図


2号空堀
3号溝
4号溝
STA160+00
平担部2
通路4
2号溝
通路2
5号溝
ピット群
土壙
平担部1
主郭
土壙
掘立柱群
1号溝
通路5
通路1
通路3
STA+155+60
平担部3
1号空堀
掘立柱建物跡
平担部4
副郭
3号空堀
1号土塁
STA155+20
土壙
STA155+00
0
10M

第5図　遺構配図



第５図—①　上段平場断面図

第６図　上段・中段平場遺構略図 ６－２

腰郭の南西部から幅約２m長さ約 12mの三角形状の平担な張り出しがみられる。また北東側には腰郭より１段低くなって幅約３m、長さ約 10mの三角形状をした平担な張り出しがある。２ヶ所の三角形の張り出しの西側には南北方向の３段の平担部がある。

副郭の南にのびる丘陵頂部には南北方向の長さ 20m、幅５mの土塁がみられる。また、丘陵の先端 45mの所に鞍郭を断ち切る空堀りがあり、外縁に土塁が平行する。東側 40mには土塁を間にはさむ空堀があり、尾根を切断して、副郭の南西を区画している。

Ⅲ．調査の成果

主郭と副郭を構成する平場・腰郭・通路・空堀などを調査した結果、検出した遺構は掘立柱建物跡（１棟）・門跡（５ヶ所）・土橋状遺構（２ヶ所）・溝（６本）・土壙（３基）・ピット・空堀（５本）・土塁（１本）などである。出土した遺物は須恵器・中世陶器・磁器・土師質土器・石臼・砥石・貨幣などである。ここで各平場ごとの遺構と遺物にわけ説明を加える。

１．発見された遺構

主　郭

（A）上段平場

調査対象地区は平場東端部分の約 150 ㎡である。表土の厚さは約 10cm であり、岩盤まで削平して平担な面を造成している。検出遺構は平担部でピット（約 50 個）と土壙（１基）である。遺構の確認はいずれも岩盤の上面である。

調査区の南側から中央北寄りにかけてピットが検出されている。いずれも岩盤を掘り込んでいる。ピットの形態は長方形と楕円形のものがみられ、大きさは長軸 20～30m×短軸 10～20cm である。側壁には掘る際の工具痕跡のみられるものもある。ピットをみると柱痕跡のみられるものは１個だけで他は認められなかった。

ピットは平場の南側と中央北寄りの２ヶ所にややまとまりを示す。その配列をみると直交して並ぶピットがあり重複した掘立柱建物跡４棟（２・３・４・５号掘立柱建物跡）の存在が考えられた。しかし、１部分の調査であったため全体の規模は確認できなかった。

掘立柱建物跡

１号棟

平場の南隅に位置し、ピット４が２号棟と重複するがその新旧関係は不明である。南側柱列が通路の北側壁と併行している。桁行２間（3.6m）、深間１間（1.2m）以上の東西棟である。桁行の柱間平均値は約 1.8mである。柱穴は長方形で、大きさはピットをのぞき他は約 22cm×18cm である。

２号棟

１号棟の北側に位置する。桁行３間（4.4m）、梁間１間（1.2m）以上の東西棟である。桁行柱間寸法は 1.5mである。掘り方の形態は長方形と楕円形のものがみられる。その規模は 20cm～15cm である。

３号棟

平場の中央付近にあり、４号棟と重複するが、柱穴の切り合いがなく新旧関係は不明である。桁行２間（3.8m）、梁間１間（1.5m）以上の南北棟である。桁行柱間平均値は 1.9mである。梁間の南・北側の柱穴は中央にみられなく南列が 1.6m＋1.2mで、北側が 1.4m＋（1.8m）である。柱穴はいずれも楕円形で、大きさは西列の柱穴が約 20cm×15cm とほぼそろうが他は様々である。深さは 20～15cm である。

４号棟

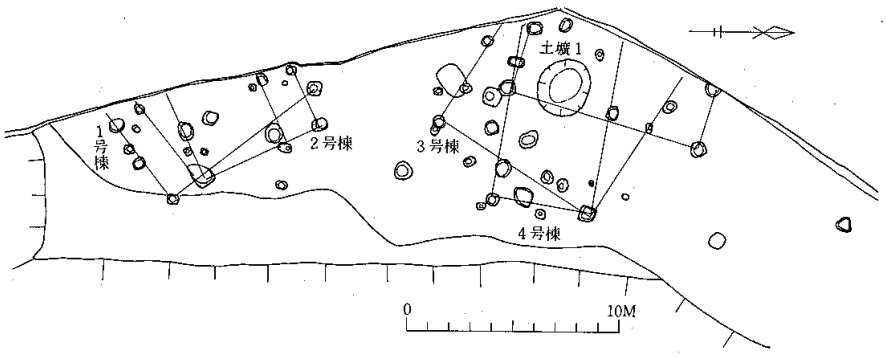
３号棟のやや北側に位置する。桁行２間（3.6m）以上、梁間１間（2.8m）の南北棟であり東に縁がつく。柱穴掘り方は楕円形で、大きさ、深さは様々である。

土　壙

平場中央部に位置し、岩盤より掘り込まれている。平面形は楕円形で、規模は長軸 1.1m×短軸 0.98m、深さ 0.47mである。長軸の方向は北西－南東方向である。底面は平担で、側壁は底面より斜めに立ち上る。遺物としては堆積土中から白磁皿の口縁破片が出土している。（第 22 図－１）。

上段平場出土遺物

平場で発見された遺物は磁器の破片であり、この中で２～４は白磁の皿で５は染付の皿である。



第７図　上段平場掘立柱建物跡

（B）中段平場

上段平場東側にあり、約３ｍ低い南北 25m×東西 14mの平場である。表土の厚さは約 20cm であり、平場の構築をみると西側は岩盤を削平し、東側は斜面に積土を行なって平担部をつくり出している。

検出遺構は南北方向の３本の溝・通路１（門）、土橋状遺構、ピットなどである。

通路１（第１号門跡）

平場の南東隅に位置し、上段平場に連絡する遺構である。遺構の西側部分は調査区外にのびるため、全体の形態・規模は不明である。

遺構は斜面部分の岩盤を掘り込んで切り通しており、両側壁下にピットが掘り込まれている。上幅は４ｍで、底面幅は東側（１号溝から通じる部分）で 2.4m、西側（平場に続いていく部分）で 1.4mとなり、西側がせまくなっている。断面形は底面が皿状をしており、側壁はゆるやかに立ち上る。底面は上段平場に向ってゆるやかにのぼっていく。

堆積土は７枚にわかれる。１層が表土（黒褐色土）である。２～７層は暗褐色土・黒褐色土がレンズ状に堆積しており、自然に流入したものである。９層はにぶい黄褐色土で通路側壁～底面全体に 20～25cm の厚さで堆積しており、使用時に壁面がくずれて埋まったものと思われる。底面から洪武通宝が出土している。

建物跡

側壁下のピットは南側と北側に７ケずつ配されている。いずれも柱痕跡は認められなかったが、柱穴の配列と規模などから桁行１間×梁間１間の建物が４棟考えられた。

Ａ号棟

Ｂ・Ｃ号棟と重複して最も新しく、Ｂ号棟の柱穴１・２を共有するものである。ピットの形態は楕円形で深さ、底面のレベルなどは一定しない。柱間寸法は桁行 2.1m、梁間 1.5mである。

Ｂ号棟

Ａ号棟と重複し切り合いからＡ号棟より古い。ピットの形態は楕円形で深さ、底面のレベルなども一定でない。柱間寸法は桁行 2.1m、梁間 1.6mである。

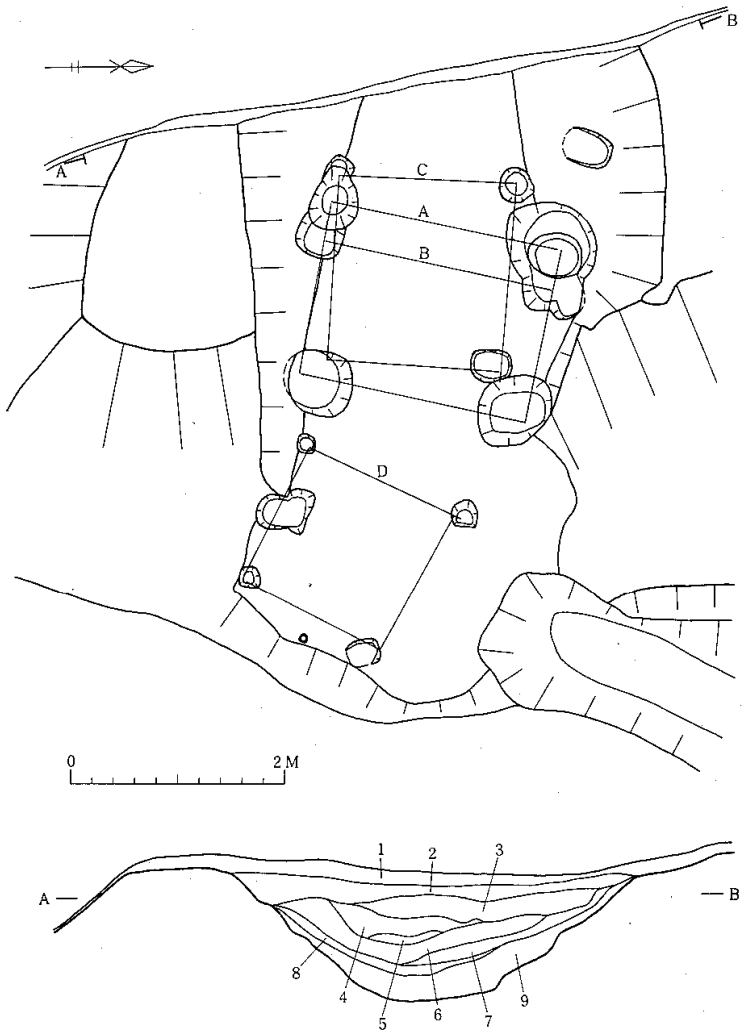
Ｃ号棟

Ａ・Ｂ号棟と重複し柱穴、ピットの切り合い状況からＡ号棟よりも古いことが考えられる。柱穴は楕円形で、深さのレベルは一定でない。柱間寸法は桁行 1.6m、梁間 1.7mである。

Ｄ号棟

通路から通じる部分にある。柱穴は楕円形で、深さ、底面レベルは一定しない。柱間寸法は桁行、梁間とも 1.5mである。

各柱穴の規模、深さ、形態は第２表のようになる。掘り方については柱痕跡はＰ．３、Ｐ．６に



層位	土色	土性	備考
1	黒褐色土	シルト	表土
2	暗褐色土		門埋土
3	褐色土		
4	暗褐色土		
5	黒褐色土		

層位	土色	土性	備考
6	暗褐色土		門埋土
7	暗褐色土	凝灰岩が入る	
8	黒褐色土		
9	にぶい黄褐色土		

第8図　通路1平面図・断面図

認められＡ号とＢ号棟が大きく、Ｃ号、Ｄ号は小さい。

通路２（第２号門跡）

平場の中央部分で確認された。南側は削平を受けて１部失なわれ、本来の規模は不明である。現存する部分は地山を切り通している。規模は長さ３ｍ、上幅３ｍである。底面幅は東側で2.1m西側で1.6mである。底面は皿状をしており、側壁はゆるやかに立ち上る。

堆積土は５層みられ、５層は床面上にほぼ水平に堆積し、３、４層は南側から、１・２層は北側からなげこんだ状況を示しており、１層上面は平担面をつくるための整地層面となっている。

建物跡：通路の南側底面にピットが４ケ検出された。掘り方のみで柱痕跡は確認できなかった。ピットの規模・深さはそれぞれ異なるが、組合せから桁行１間×梁間１間の建物が考えられた。柱間寸法は桁行２ｍ、梁間1.2mである。

通路３（第３号門跡）

２号溝の南端に岩盤を掘り込んだピットが 1.8mの間隔をおいて東西に２つ並んで認められ、さらに南側の空堀１の北壁でも岩盤を掘り込んだピットが1.2mの間隔をおいて東西２つ並んで認められた。

溝

平場の西側に上段平場の下端にそって南北方向の溝が２条（１・２号溝）確認された。１号溝と２号溝は重複しており、１号溝が２号溝を切ってつくられている。

１号溝

溝は平場南側で平場から通路１に連絡する土橋状遺構によって途切れて、南と北に分かれている。

北側の部分は土橋状遺構の壁際から平場の北端まで延びており、両端ともゆるやかに立ち上る。規模は長さ約 21m、上幅約２ｍで深さ 0.8mである。堆積土は８層認められ断面形は「Ｕ」字状をしている。南側の部分は約４ｍ確認でき南側の空堀１に開いていく。上幅約５ｍで深さ0.5mである。

遺物は北側部分の堆積土下部から石臼破片が出土している。

２号溝

平場中央付近から北側の整地層上面で確認でき、残存する長さは約11mである。平場中央から北東方向にのびていき、平場北端でわずかに西へ弯曲し北側の２号空堀に開いていく。溝の両壁の確認できる部分は北側約３ｍである。その規模は幅約1.3m、深さ約0.5mである。堆積土は６層認められ、断面形は「Ｕ」字状をしている。

遺物は溝埋土上面から中世陶器、土師質の皿が出土している。

ピット

１号溝の南側部分の西壁と２号溝の東壁部分でピットが確認されている。

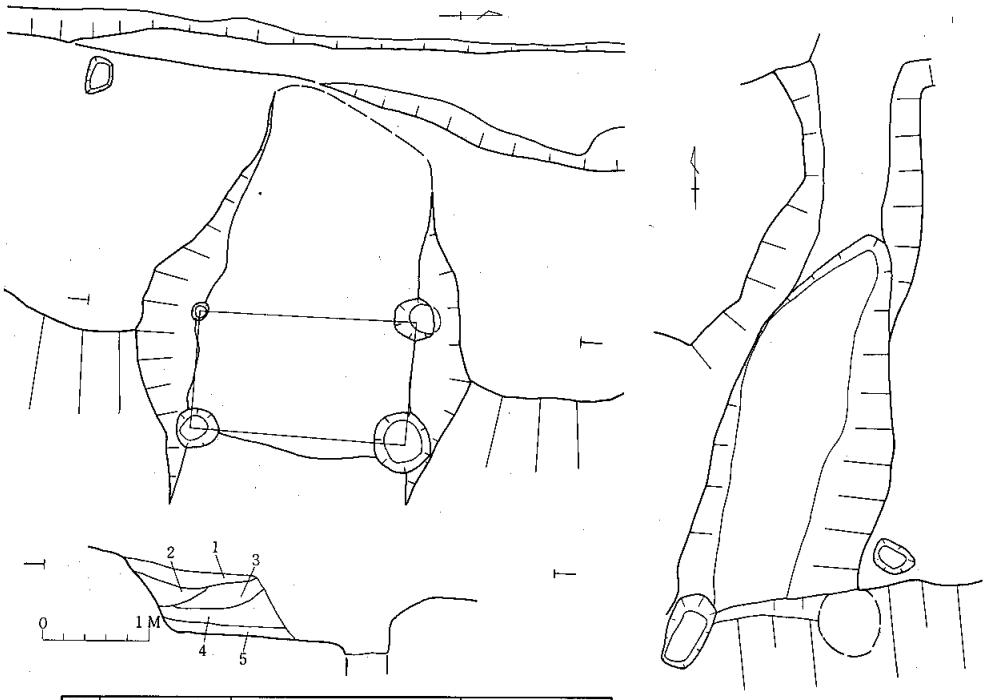
ピットは１号溝南側西壁の溝上端部に確認でき、岩盤を掘り込んでいる。これらは南北方向に 1.8～1.9mの間隔で一列に６個並んでいる。平面形は楕円形であり大きさは長軸約 30cm×短軸 20cm で、深さは 20cm である。柱痕跡は認められない。

２号溝の東壁のピットは３個で、壁斜面と平担部で確認できたが、配列は不規則である。平面形は楕円形で大きさは長軸約 20cm×短軸 10cm で深さは約 30cm ある。

平場出土遺物は整地の平場面からキセルが出土している。

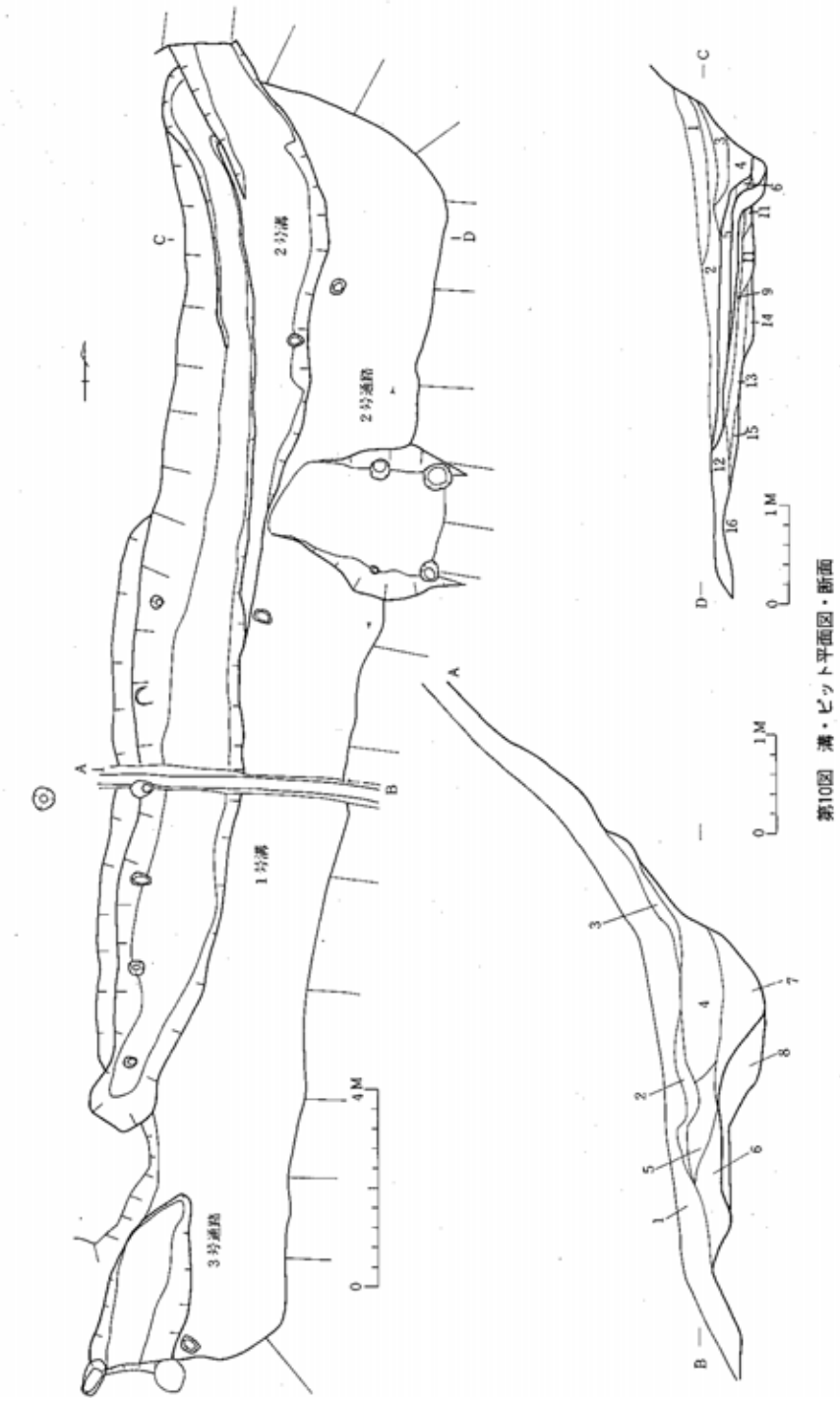
（C）下段平場

上段平場の北側にある１段低い平場である。調査はその東端部分であり、現状では１段高い



層位	土色	土性	備考
1	暗灰黄色	粘土質、大きな凝灰岩	2号通路埋土
2	オリーブ褐色	粘土質	
3	明黄褐色	粘土質、凝灰岩を含む	
4	暗オリーブ褐色	粘土質	
5	黄褐色	粘土質、小さな凝灰岩を含む	

第９図　通路、２･３号平面・断面図



第10図　溝・ピット平面図・断面

平担面となっており、東西 15m×南北 10mである。上段平場の下端との間に東西方向の堀状のくぼみが確認できる。調査を行なったのは東端の９m×９mである。調査の結果、平担な平場の南側で平場を区画する空堀（２号空堀）・空堀東端に通路（第４号通路）が検出された。

平担面

上段平場より４m低い平場で遺構は検出できなかった。この平場は南北幅４mである。構築方法は北へゆるやかに傾斜している岩盤の上に５枚の積土を行ない土塁状の高まりをつくり、空堀の壁としている。上面は平坦面となっている。

第３号溝

平場を区画する東西方向の溝である。規模、形態についてみると調査区西側では上幅約７m底面幅約 2.1mで底面は平担でゆるやかに立ち上る。南壁は岩盤で北壁は整地の積土となっている。調査区中央では上幅 4.5mで底面はＶ字状をしている。南北壁は岩盤となっている。

堀の堆積土中から石臼が出土している。

通路４（第４号門跡）

空堀の東端にあり地山を掘り込んだ切通し状をしており、東側がいくぶん削平されている。現状の規模は長さ３mで上幅約 2.7m、高さ約 1.5mである。底面は傾斜してのぼっていき、奥で約 20㎝ ほど立ち上り空堀に続いていく。底面幅は東で１m、立ち上る部分で 0.8mとなり、奥幅がせまくなっている。両側壁に柱穴が配置される。東端の柱穴の一部が削平されていることから、本来は東側の土橋状遺構に続いていたと考えられる。

建物跡：通路の底面の東・西壁にピットが２個ずつ検出された。形態は方形であり、規模は異なる。柱痕跡は北側のピット列（１・２）で認められた西側のピット列（３・４）では確認できなかった。組合せから１間×１間の建物跡となる。桁行の柱間寸法は、南北列ともに 1.8mで梁間は西列が 1.8m、東列が 2.2mとなって柱穴の配列は台形状をしている。

出土遺物

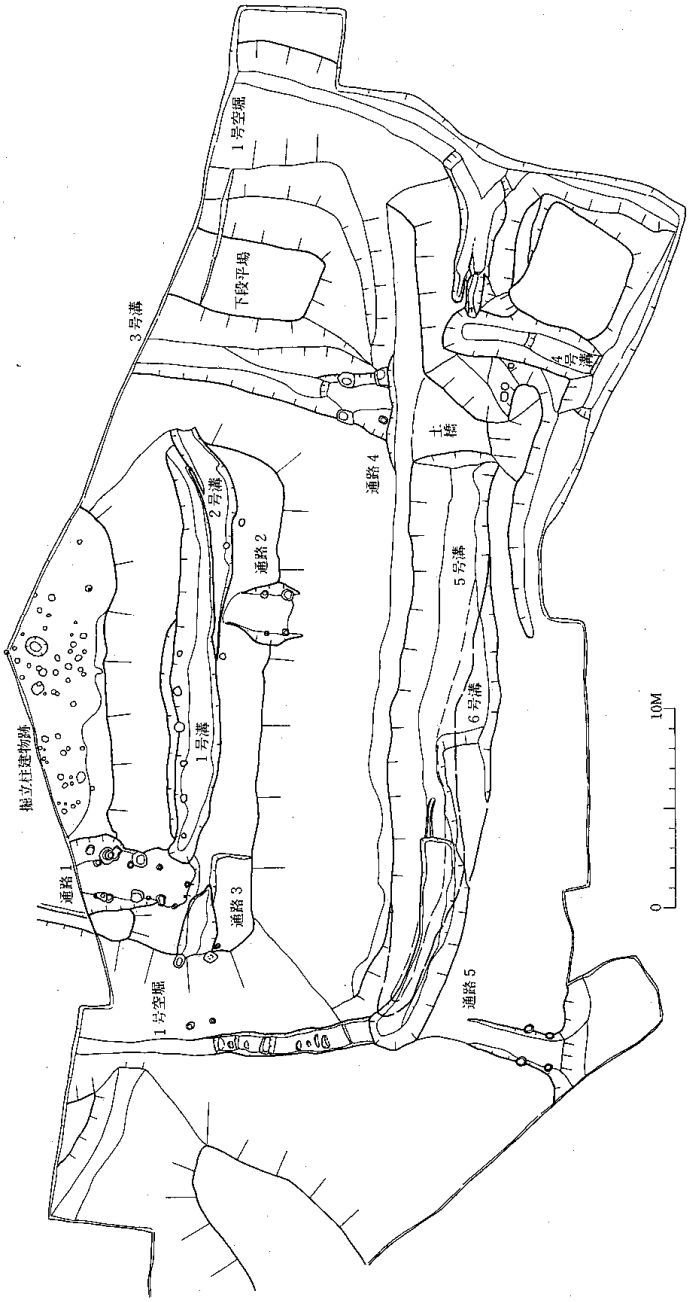
遺物は平場の堆積土中から白磁が出土している。

（D）通路状平場

中段平場の東側にあり約３m低い平場である。検出遺構は平場南端にある通路５、中央北寄りにある土橋、平場を区画する溝（第４号、５号、６号溝）である。

平　　場

調査した面積は 400 ㎡である。平場は４号溝の南側の 35m×８mの平場、標高 61mとの斜面に整地を行なっている。東側の整地層断面をみると、東へ傾斜した岩盤に厚さ２mほどの積土を行ない平担面としている。その後、６号溝を埋めて２回目の整地面として平場を広くしてい


1号空堀
下段平場
3号溝
通路4
土橋
4号溝
2号溝
通路2
5号溝
6号溝
掘立柱建物跡
1号溝
通路1
通路3
1号空堀
通路5
0
10M

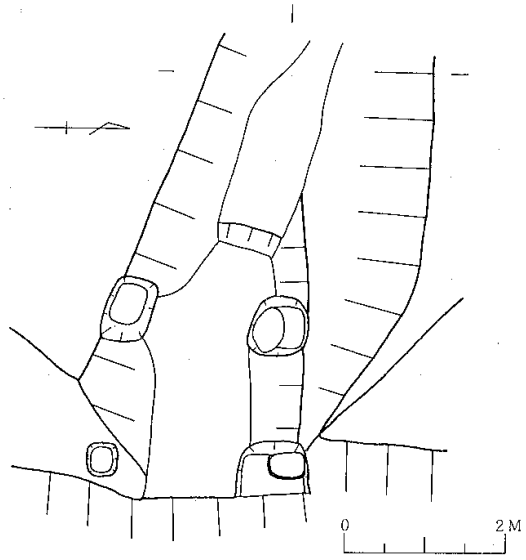
第11図　㊤主郭平面図

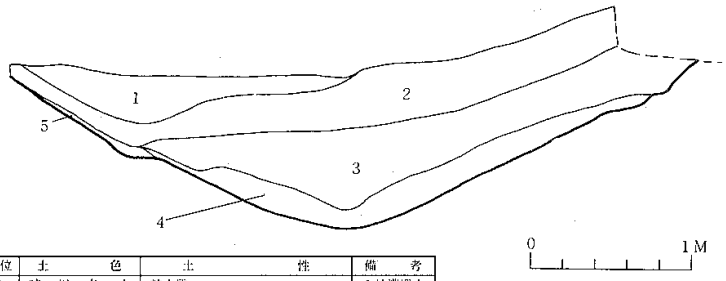
る。

通路５（第５号門跡）

平場南端に位置し、地山面を東西方に切り通しており、東側の沢より本平場に通じる。規模は長さ５m、上幅 1.4～1.8mである。底面は平担で西へ傾斜して登っていき、幅1.3mの堀状の通路を経て平場にいたる。底面幅1.2m×1.4mで西側が東よりせまい。

建物跡：南・北の両壁に２ケずつ柱穴が配置される。建物の規模は桁行１間、梁間１間である。柱間寸法は桁行1.7m、梁間1.4mである。柱穴掘り方は、４ケとも楕円形であるが西列で





層位	土色	土性	備考
1	暗褐色土	粘土質	3号溝埋土
2	褐色土	粘土質	
3	暗オリーブ褐色土	粘土質、小さな凝灰岩が多く混る	
4	オリーブ褐色土	粘土質、凝灰岩が少し混る	
5	黄褐色土	粘土質、小さな礫が多い	

第12図　通路４平面図

60×40cm、東列で 20×30cm であり、東列が大きい。深さは 0.5～0.8cm で一定でない。柱痕跡は認められなかった。

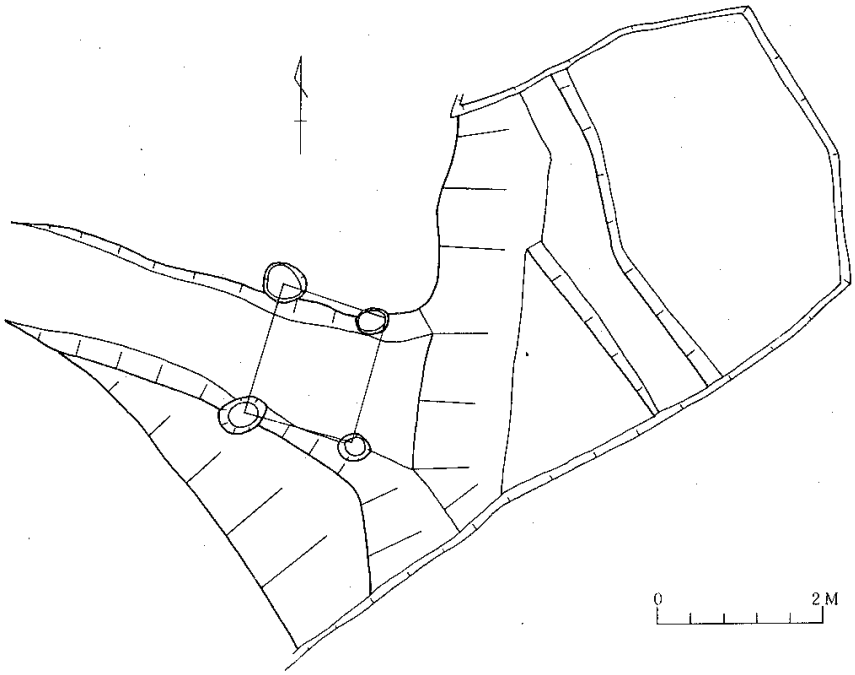
土橋状遺構

平場の中央北寄りにあるが、東側がいくぶん削平されている。土橋は積土によるもので５号溝の上に構築しているもので５号溝より新しい。平面形はほぼ台形をしており、規模は長さ２m、東幅 0.8m、西端幅 2.3mである。断面の形状は台形である。北側に傾斜している。

溝

溝は３本確認された。４号溝は５号溝と直交して東西にのびるもので、５、６号溝は平場西側を南北にのびるものである。３本の溝の重複関係をみると、４号溝は５号溝を切っており、５号溝は６号溝の埋土を切っていることがわかり、６号溝→５号溝→４号溝の順でつくられている。土橋は５号溝の上につくられるが４号溝との重複関係は不明である。

４号溝：土橋状遺構の北側にあり５号溝を切って東西方向にのび東の沢に開いていく。規模は長さ約８m、幅 2.5～３mである。堆積土は 10 層認められにぶい黄褐色土、灰黄褐色土が自然



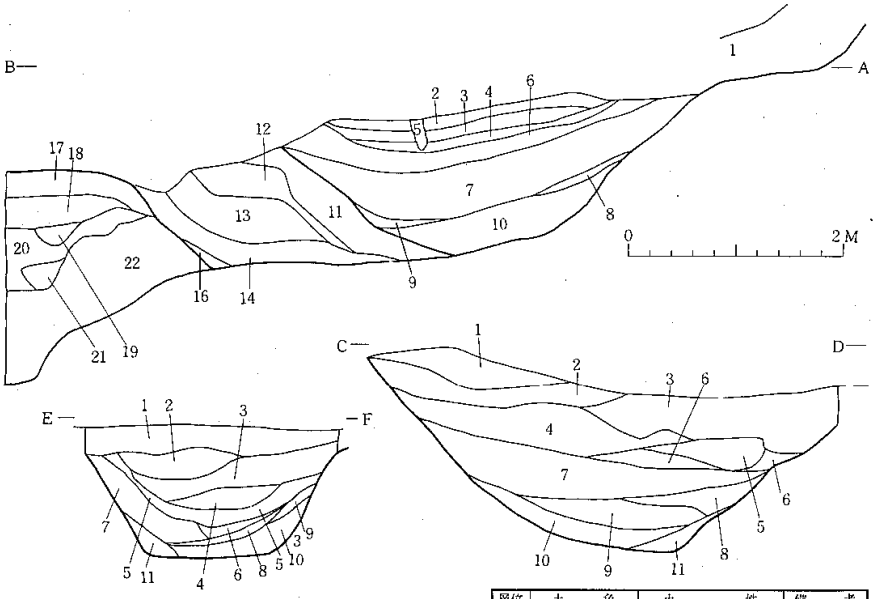
第13図　通路５平面図

流入している。

５号溝：６号と重複しており、切り合いから６号→５号→４号の関係が認められる。

東斜面腰郭の下を南北に走るもので、主郭と副郭を区画する空堀に通じる。長さ33m、幅２mである。東壁は空堀６の埋土を壁としており、西壁は岩盤である。底面は皿状をして壁はなめらかに立ち上る。埋土は10層あり自然堆積の状況を示す。

６号溝：５号溝より古い溝で南側は５号溝によってこわされており、平場中央部分に認めら



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色土	粘土質	５号溝埋土
2	にぶい暗褐色土	粘土質	〃
3	極暗褐色土	粘土質	〃
4	にぶい黄褐色土	粘土質	〃
5	暗褐色土	粘土質	〃
6	褐色土	粘土質	〃
7	暗褐色土	粘土質	〃
8	暗褐色土	粘土質	〃
9	黒色土	シルト	〃
10	黒褐色土	シルト	〃
11	暗褐色土	粘土質	〃
12	黒褐色土	粘土質	６号溝埋土
13	暗褐色土	シルト	〃
14	灰褐色土	粘土質	〃
15	黒色土層	シルト	〃
16	暗褐色土	粘土質	〃
17	黄色土	粘土質	〃
18	黒褐色土	シルト	〃
19	極暗褐色土		〃
20	淡黄色土	粘土質	〃
21	黒褐色土	シルト	〃
22	淡黄色土	シルト	〃

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色土	粘土質	４号溝埋土
2	褐色土	粘土質、しまっている	〃
3	にぶい黄褐色土	粘土質、しまっている	〃
4	灰黄橙色土	シルト	〃
5	にぶい黄褐色土	粘土質	〃
6	灰黄褐色土	砂質	〃
7	にぶい黄橙色土	シルト	〃
8	にぶい黄褐色土	砂質	〃
9	にぶい黄橙色土	砂質	〃
10	にぶい黄褐色土	砂質	〃
11	にぶい黄褐色土	砂質	〃

層位	土色	土性	備考
1	淡褐色土	粘土質	５号溝埋土
2	暗褐色土	シルト	〃
3	にぶい黄褐色土	シルト、しまっている	〃
4	にぶい黄褐色土	シルト	〃
5	黒色土	シルト	〃
6	にぶい黄褐色土	シルト	〃
7	灰黄褐色土	シルト、しまっている	〃
8	にぶい黄褐色土	粘土質、しまっている	〃
9	灰黄褐色土	シルト、しまっている	〃
10	にぶい黄橙色土	粘土質、しまっている	〃
11	にぶい黄褐色土	粘土質、しまっている	〃

第14図　４・５・６号溝断面図

れる。残存長は 33mである。東壁は平場の整地層を掘り込み西壁は岩盤を掘り込んでいる。埋土 17～22 までは整地面をつくるための埋土で 11～16 は自然堆積土である。６号溝埋土の整地層中から国産の磁器、石臼が出土している。

空　堀

主郭と副郭を区画する空堀（１号空堀）で主郭から副郭の北腰郭に通じる通路ともなっている。

１号空堀は岩盤を掘り込んでいる。壁はゆるやかに立ち上がる。底面は皿状をしている。堆積土は９枚みられる。９層は岩盤の底面が褐色となっている。１・２・３・４層が北壁側から５・６層は南壁から交互に流れ込み、７・８層は両側から流れていると思われる。

調査の結果、堀底面に６段の足場が掘られている。

階段状通路の南側へ入る通路は岩盤を掘りくぼめており、底面は平担で、側壁は下の $^{1}/_{3}$ がほぼ直角に立ち上がり途中から開いていく。堆積土は 15 枚みられ、西側と東側から交互に流れ込んでいる。

〔副　郭〕

副郭は主郭の南西にある１号空堀をはさんで南に位置する。頂部の平場を中心として、平場をめぐる２段の腰郭（ａ）・（ｂ）、腰郭（ｂ）の北西部に張り出す腰郭（ｃ）、腰郭（ａ）の南西に張り出す腰郭（ｄ）、腰郭（ｃ）・（ｄ）間の腰郭（ｅ）などが配置される。また、南側にのびる尾根状には土塁（１・２・３号）、空堀（５・６号）などが認められる。

（Ａ）頂部平場

平場は標高 73.5mの丘陵頂部にあり、本遺跡で最高所に立地する。表土の厚さは約 15cmで、表土下はすぐに岩盤である。平場の平面形は隅丸の長方形上をしており、規模は長軸 15m×短軸 11mである。

遺構としては中央北寄りに平担面から斜面にかけ岩盤を掘り込んだピット群が検出された。このピット群には「掘り方」の中に「柱痕跡」を確認できるものとできないものがみられた。この中から「柱痕跡」や柱列の組合せなどから１棟の掘立柱建物跡が考えられた。

掘立柱建物跡

身舎と四面に縁（庇の可能性あり）がめぐる東西方向の長方形の掘立柱建物跡である。身舎は桁行５間×梁間１間であり、縁の出は約半間である。また、東・西列の棟持柱と相対する縁の部分にピットが確認されている。桁行の柱間寸法は北列で 1.9＋1.8＋２＋1.9＋2.5＝10.1m南列で 1.8＋1.9＋1.95＋2.5＝10.05m、梁間寸法は東西列ともに４ｍである。柱間隔は西から４間分の平均値が 1.8～1.9ｍで東はじの１間が 2.5mであり、東側１間の柱間隔がやや広い。身舎の隅柱より縁までの柱間寸法は北南列は 0.8～0.9mで東列は 1.1m、西列は１ｍである。縁の

東、西列中央の柱穴の柱間寸法は2.2＋1.8＝４ｍとなっている。

柱穴には掘り方と柱痕跡の認められるものと掘り方だけのものがある。柱痕跡のみられるものには身舎と縁の柱穴の掘り方が共通しているものがある。

掘り方の平面形は長方形と楕円形である。身舎の柱痕跡は楕円形で 70×60㎝、60×40㎝の２種類がある。

縁の柱穴は長方形と楕円形のものがみられ、規模は長方形のピットで 30×20㎝、楕円形のピットで40×20㎝である。

平担部１

副郭平場の北側にある。西側の長方形状の平担部とその東～北側に１段低くめぐる平場の２段からなる。西側の平担部は標高約60ｍでその広さは約60㎡（８ｍ×7.5ｍ）である。東～北をめぐる平担部は一部分の調査であり、全体の面積は不明である。

西側の高い部分からは15ケのピットが検出されているが、その組合せは不明である。

東～北側にめぐる平場からは土壙（第５土壙）とピットが検出されている。ピット群は13ケ検出されているが、その組合せについては不明である。

第５土壙

平面形が楕円形であり、その規模は長軸 32ｍ、短軸 22ｍである。断面をみると、底面は平担であり、壁は底面より比較的急に立ち上り、途中から広がって上端にいたる。底面はやや円形をしており径90㎝である。底面の中央に径30㎝、深さ８㎝のピットがある。

平担部２

東側の沢に面した部分にあり、平担部１より５ｍ低い平場である。表土の厚さは30㎝ であり、その下は整地面となっている。遺構は整地上面でピット群、平担部東側で空堀（２号空堀）を確認した。

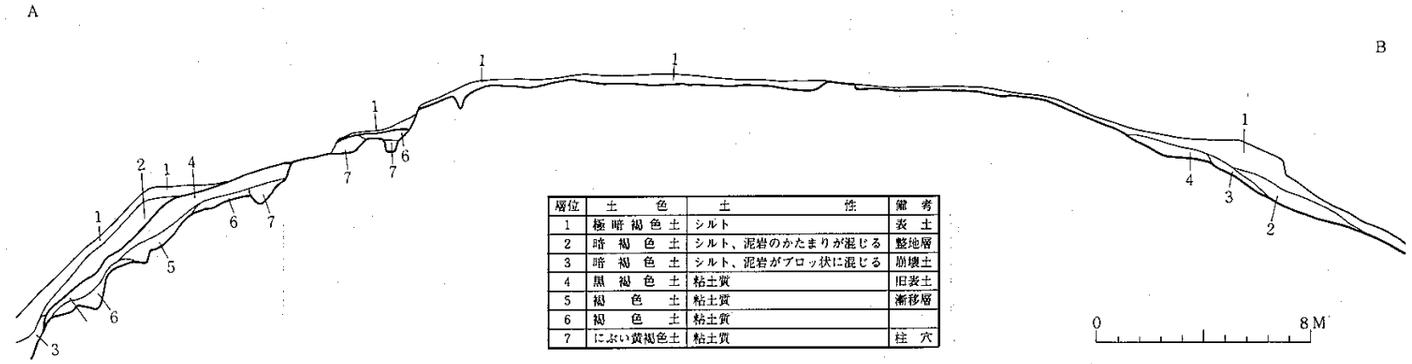
ピット群

西側と東側にまとまってみられ、いずれも整地層を掘り込んでいる。平面形は円形のものと長方形のものがみられる。大きさは円形のものが径約 10㎝、長方形のものが約30×20㎝である。これらのピットには柱痕跡の認められるものや組み合うものがない。

平場は斜面に整地を行なって平担面をつくっている。

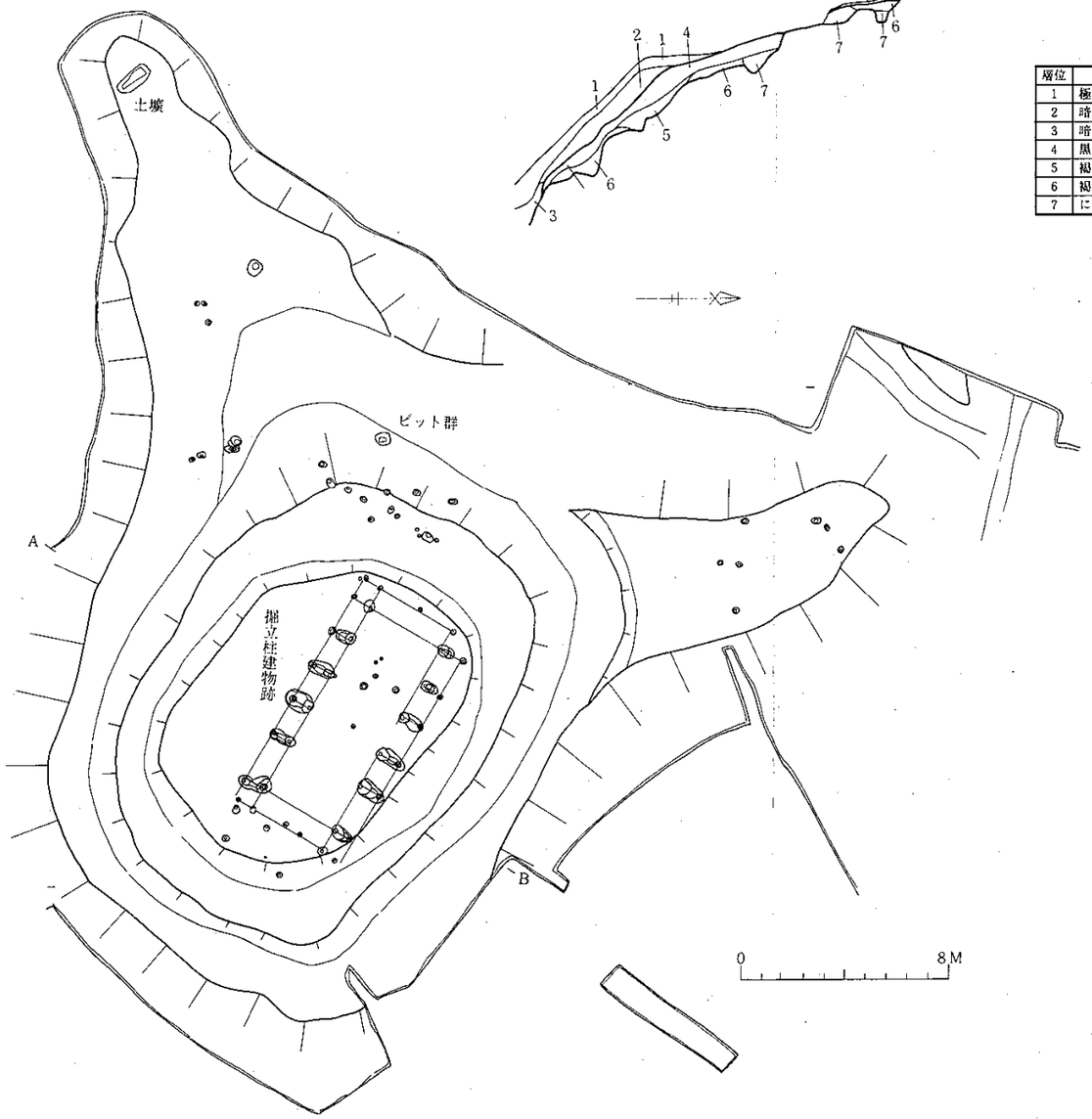
平担部３

地山面で確認された南北に長い溝であるが、３号空堀、４号空堀の間では土塁下になっている部分で認められた。これらは２本の空堀で連続しないが、本来は連続していたものと思われる。３号空堀の北側の規模は長さ約22ｍ、幅 0.6ｍ、深さ約 40㎝ である。溝の北側は副郭の腰郭に接続していき平担となっていく。堆積土は１層認められ、黒色土である。底面は皿状をして

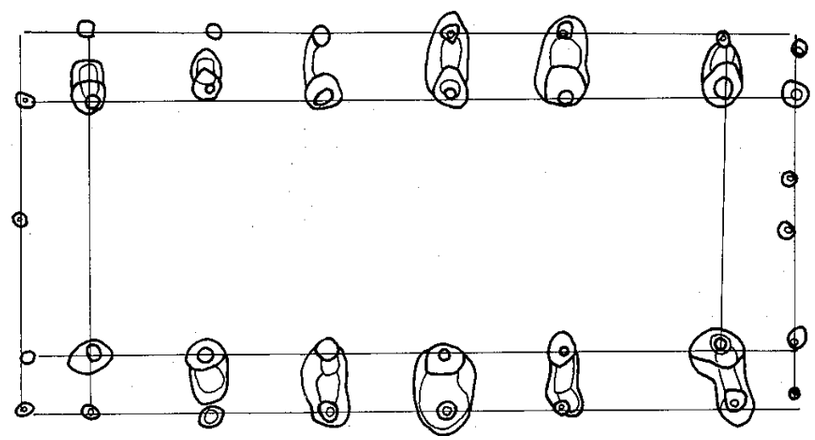


層位	土　色	土　性	備　考
1	極暗褐色土	シルト	表　土
2	暗　褐　色　土	シルト、泥岩のかたまりが混じる	整地層
3	暗　褐　色　土	シルト、泥岩がブロック状に混じる	崩壊土
4	黒　褐　色　土	粘土質	旧表土
5	褐　色　土	粘土質	漸移層
6	褐　色　土	粘土質	
7	にぶい黄褐色土	粘土質	柱　穴

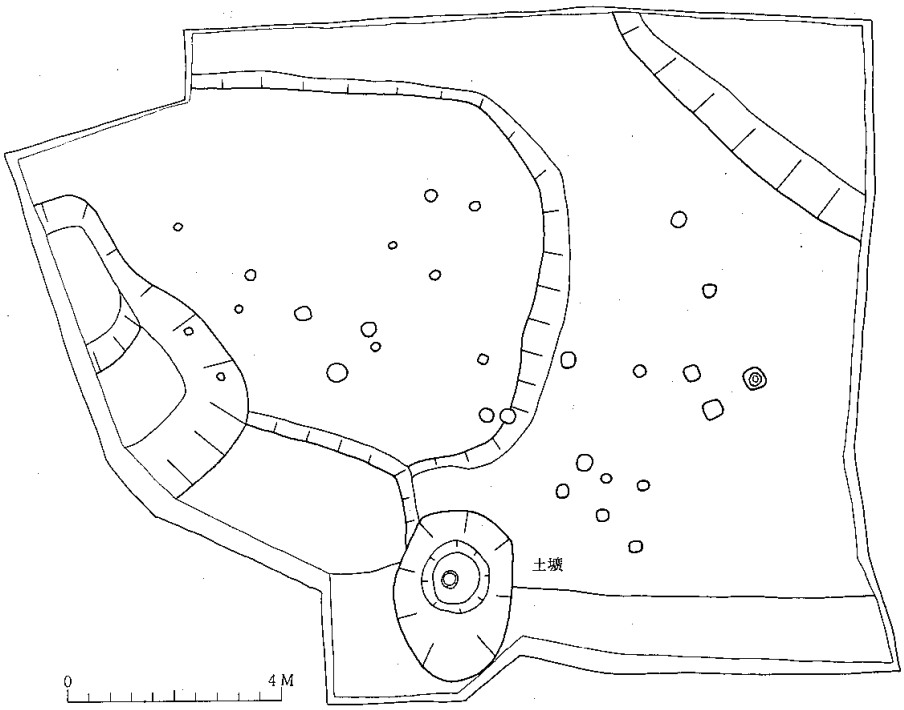
第15図②　副郭断面図



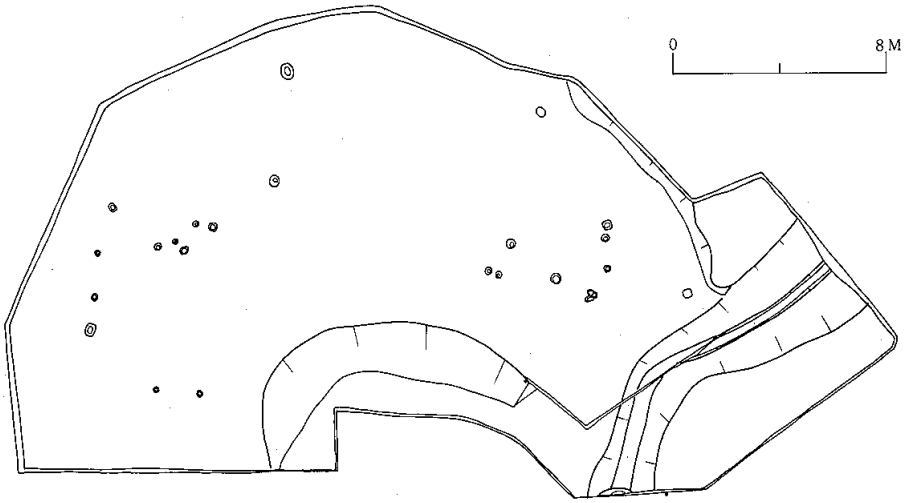
第15図　副郭平面図



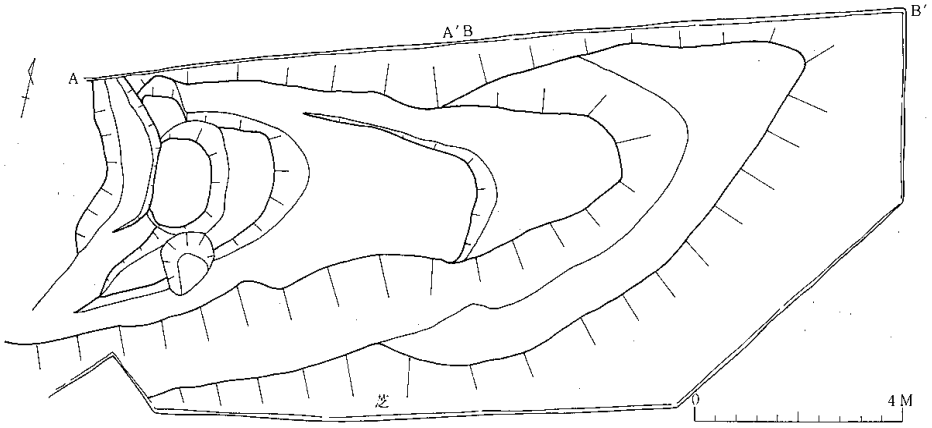
第16図　掘立柱建物跡



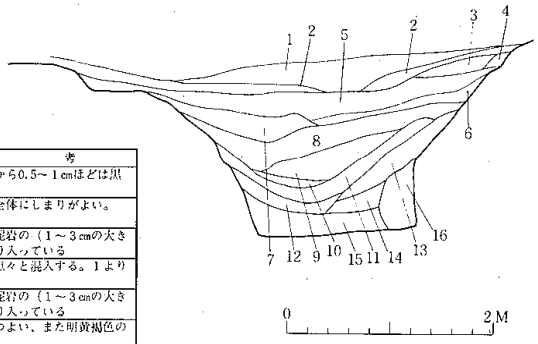
第17図－１　平担部１平面図



第17図－２　平担部２平面図

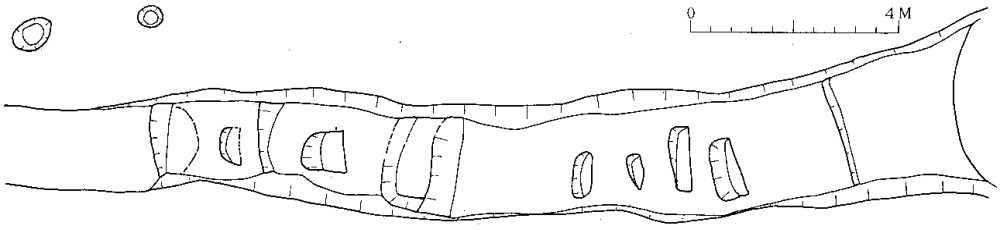


平担部３平面図



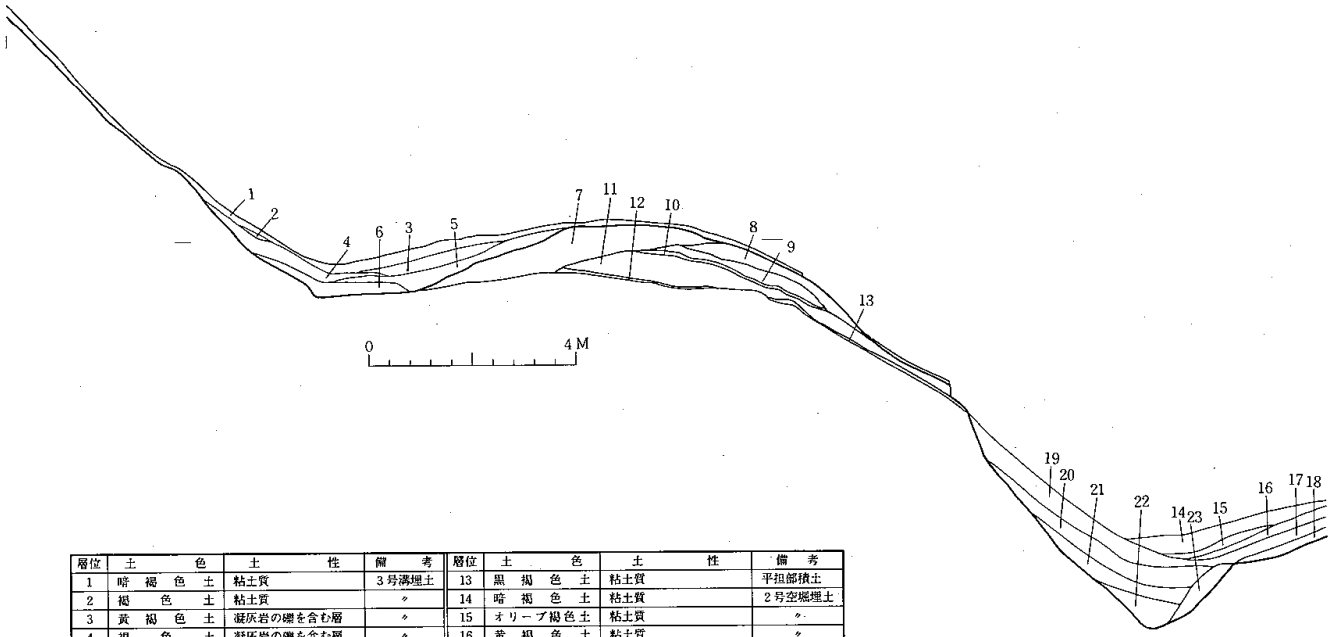
空掘１号断面図

土層	土　　色	備　　考
1	表　　土	粘りはつよくない。表土から0.5～１cmほどは黒褐色土で有機質
2	暗 褐 色 土	１によくにるが、１より全体にしまりがよい。①ａとしてもよい
3	にぶい黄褐色土	明黄褐色・黄橙・灰白の泥岩の（１～３cmの大きさのもの）くず石がかなり入っている
4	褐　色　土	明黄褐色の泥岩の細粒が点々と混入する。１よりやや粘りがある。
5	にぶい黄褐色土	明黄褐色・黄橙・灰白の泥岩の（１～３cmの大きさのもの）くず石がかなり入っている
6	褐　色　土	４に似るが、やや黒味がつよい、また明黄褐色の泥岩の粒もより多い。
7	暗 褐 色 土 層	中に黒褐色の有キ土を少しまじえる。泥岩のくずあり
8	にぶい黄褐色土	５と同じ
9	褐　色　土	４に同じ、５～７cm大の泥岩が点々と入る
10	暗 褐 色 土	７に同じ
11	褐　色　土	４に同じ



空掘１号平面図

第18図　１号空堀平面図・断面図



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色土	粘土質	3号溝埋土
2	褐色土	粘土質	〃
3	黄褐色土	凝灰岩の礫を含む層	〃
4	褐色土	凝灰岩の礫を含む層	〃
5	にぶい黄褐色土	凝灰岩粒を含む層	〃
6	明黄褐色土	粘土質、しまっている	〃
7	明黄褐色土	凝灰岩の礫を含む	平担部積土
8	オリーブ褐色土	凝灰岩の礫を含む	〃
9	暗オリーブ褐色土	凝灰岩の礫を含む	〃
10	黒褐色土	粘土質	〃
11	明黄褐色土	凝灰粒を含む	〃
12	褐灰色土	粘土質	〃

層位	土色	土性	備考
13	黒褐色土	粘土質	平担部積土
14	暗褐色土	粘土質	2号空堀埋土
15	オリーブ褐色土	粘土質	〃
16	黄褐色土	粘土質	〃
17	褐色土	粘土質	〃
18	灰黄色土	凝灰岩を多く含む	〃
19	明黄褐色土	粘土質	〃
20	淡黄色土	粘土質、凝灰岩粒を含む	〃
21	暗オリーブ色土	凝灰岩を多く含む	〃
22	明褐色土	凝灰岩を多く含む	〃
23	黄褐色土	粘土質	〃

第19図　2号空堀断面図

壁はゆるやかに立ち上る。３号空堀の南側では、長さ７ｍ確認でき幅は1.4ｍで、深さ50㎝である。堆積土は３枚認められ、黒色土、浅黄色、黄褐色土などである。底面は平担で壁は急げきに立ち上る。

土塁の積土の下では幅1.6ｍ、深さ50㎝の溝を確認した。堆積土は黄褐色と褐色土である。形態的には３号空堀南側部分の溝と断面の形状が似ている。

館を区画する遺構

館内部を構成した遺構については前述したものがあり、それらを周囲の丘陵から区画する遺構には主郭北側の尾根と斜面にみられる館の北側を区画する２号空堀、平担部４の南側にある館の南側を区画する３号空堀、４号空堀、１号土塁がある。

第２号空堀

主郭の北側に尾根と斜面にみられ、北に続く尾根を東西に切って北辺を区画する堀である。

上段と中段腰郭北側では地山面と整地面で、斜面では整地層土面で確認した。

副郭の東コーナーの下段にあり、東にのびる緩斜面で、現状では幅約10ｍ、長さ2.5ｍの平場である。表土をのぞくと、地山面で、東へ１段ずつ低くなる７段の平担部からなる。西側は副郭の下段をめぐる溝によって区画されている。

平場、７つの平担部からなり、東へ１段ずつ低くなっていく、この７つの平場のうち６、５の北西端、５－２－１の南西端が平場相互に続くようになっている。また３から７号溝を通じて主郭に通じている。平場には整地層がみられる。

第７号溝

調査区内では長さ６ｍ程確認されている。底面はやや中央が低くなっている。幅約1.4ｍ、深さ40㎝で、底面幅は0.7～1.2ｍである。

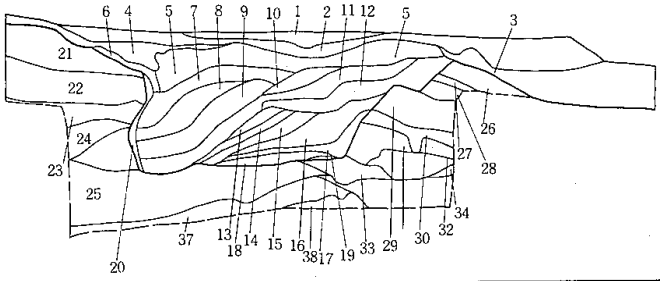
ピット、平場５の中央南寄りに岩盤を掘り込んでピットが東西に３ヶ所並ぶ。ピットの形態は長方形で、深さは約20㎝である。ピットの間かくは2.1ｍであり、壁にノミ痕が観察される。

平担部４

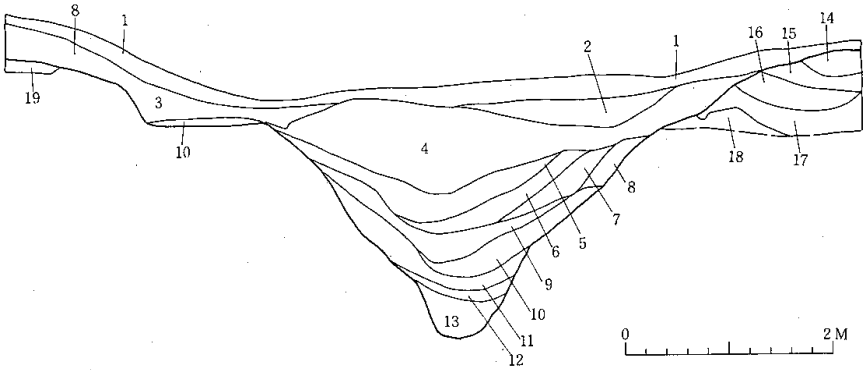
副郭の南にのびる尾根上に位置する。Ｃ腰郭より３ｍ低い平担な面である。表土の厚さは約10㎝で、表土下すぐに地山となる。検出遺構は館を区画する空堀・土塁と尾根を南北に走る溝（８号溝）である。

第８号溝

尾根では上幅約４ｍ、深さ２ｍである。堆積土は北と南から交互に流れこんでいる断面形は「Ｖ」字形をしている。平担部２で確認した。長さは12ｍである。北側は底面が平担で側壁がゆるやかに立ち上がる。下から$^{2}/_{3}$の高さからさらに開いていく。上幅3.8、深さ1.5、底面1.8ｍである。北側と南側で規模、深さ、断面形態とも異なる。

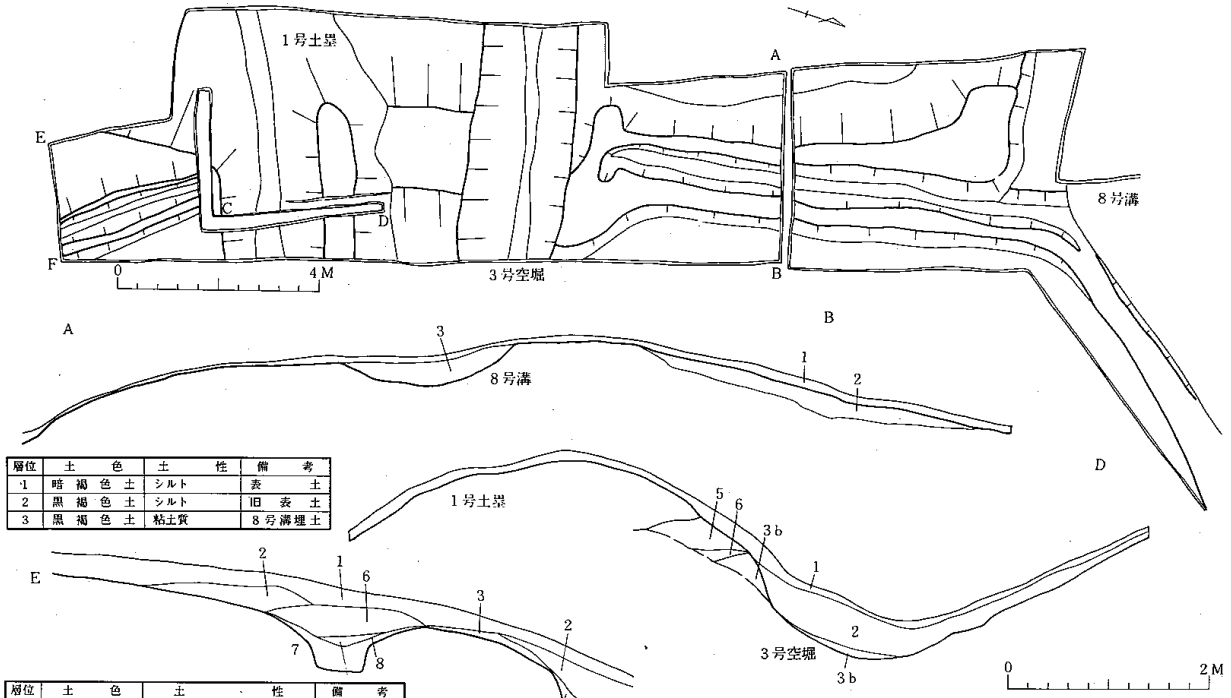


層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	淡黄色土	粘土質	2号空堀埋土	20	黒褐色土	粘土質	整地層積土
2	褐色土	〃		21	黄褐色土	〃	
3	明黄褐色土	〃		22	黄色・土	〃	
4	黒褐色土	シルト		23	淡黄色土	〃	
5	淡黄色土	粘土質		24	黄色土	〃	
6	浅黄色土	〃		25	明黄褐色土	砂質	
7	黄褐色土	〃		26	暗褐色土	粘土質	
8	にぶい黄褐色土	〃		27	黒褐色土	〃	
9	にぶい黄色土	〃		28	暗オリーブ褐色土	〃	
10	にぶい黄褐色土	〃		29	黒褐色土	〃	
11	にぶい黄褐色土	〃		30	黒色土	〃	
12	オリーブ褐色土	〃		31	褐色土	〃	
13	灰オリーブ色土	〃		32	褐色土	〃	
14	暗灰黄色土	〃		33	暗灰褐色土	〃	
15	オリーブ褐色土	〃		34	黄色土	〃	
16	黄褐色土	〃		35	暗灰黄色土	〃	
17	暗褐色土	〃		36	オリーブ褐色土	〃	
18	黄褐色土	〃		37	黒褐色土	〃	
19	黒褐色土	〃		38	暗褐色土	〃	



層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	暗褐色土	粘土質	表土	10	オリーブ褐色土	粘土質、小さな凝灰岩混じる	2号空堀埋土
2	黄褐色土	粘土質	2号空堀埋土	11	明黄褐色土	粘土質、小さな凝灰岩が多く混じる	〃
3	オリーブ褐色土	粘土質	〃	12	黄灰色土	粘土質	〃
4	褐色土	粘土質	〃	13	黄色土	粘土質凝灰岩が混じる	〃
5	黄褐色土	粘土質	〃	14	淡黄色土	粘土質	整地積
6	暗褐色土	粘土質	〃	15	黒褐色土	粘土質	
7	黄褐色土	粘土質	〃	16	オリーブ褐色土	粘土質	
8	にぶい黄褐色土	粘土質	〃	17	暗褐色土	粘土質	
9	暗灰黄色土	粘土質	〃	18	明黄褐色土	粘土質	
				19	淡黄色土	粘土質	

第20図　第２号空堀断面図



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色土	シルト	表土
2	黒褐色土	シルト	旧表土
3	黒褐色土	粘土質	8号溝埋土

層位	土色	土性	備考
1	オリーブ褐色土	シルト	表土
2	明黄褐色土	砂質	溝埋土
3	明黄褐色土	砂質、礫が混じる	
4	黄色土	砂質、大きな礫が混じる	
5	明黄褐色土	砂質	溝埋土
6	黒色土	砂質	
7	浅黄色土	粘土質	
8	黄褐色土	粘土質	

第21図　平坦部4

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色土	シルト	表土
2	黄褐色土	砂質	3号空堀埋土
3	黄褐色土	粘土質	
4	明黄褐色土	粘土質、凝灰岩が多く混じる	1号土塁積土
5	黒褐色土	シルト	旧表土
6	黄色土	砂質	地山
7	黄色土	粘土質	

１号土塁

空堀の間にあるもので基底幅約５m、高さ約1.2mである。積土は４層認められ北から南に傾斜して積まれている。下まで掘っていないので構築面と全体の積土の状況は不明である。積土の下から南北に走る溝の一部が確認されている。

２．出土遺物と年代

中世～近世の出土遺物は陶磁器（８点）、土師系皿（１点）、石臼（11 点）、砥石（１点）、貨幣（３点）、キセル（１点）である。

陶磁器

陶磁器には中世陶器片（１）、舶載磁器（６）、国産磁器（１）がある。

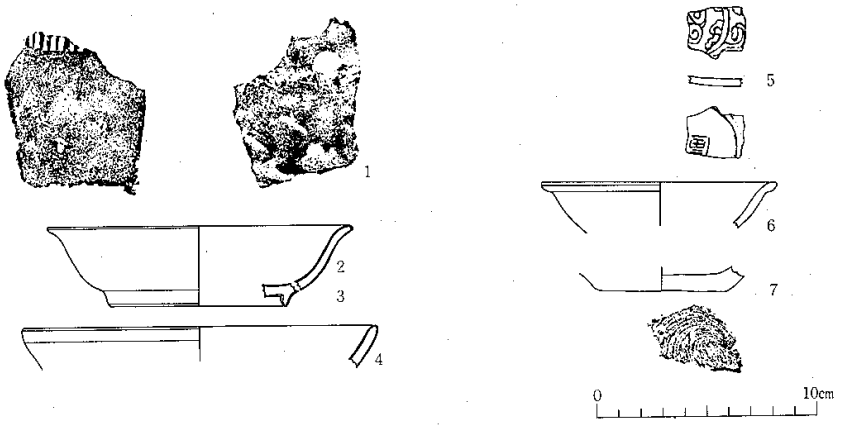
中世陶器（第 21 図１）

甕：肩から体部にかけての破片である。外面にはたたき目の１部が認められ、内面にはナデの跡が認められる。外面は灰をかぶったための灰白色の自然釉がみられる。胎土は灰白色である。

（年　　代）

中世陶器にみられるタタキの種類の中で破損した場合に１の破片と同様な平行状となると思われる種類は平行目と簾状格子目と思われる。

宮城県内で体部に簾状格子目や平行目が認められる中世陶器は高清水町観音沢遺跡、名取市清水遺跡などで出土しているが、窯跡で発見された報告例はない。



第22図　出土土器

観音沢遺跡で口縁部が残る甕で体部にタタキが認められるものはなく、口縁形態との関係は不明である。しかし、出土した口縁破片の33点のうち30点が鎌倉中期～南北朝を含めた時期のＡⅡ類であることや、土壙で口縁部ＡⅡ類がこの２種類のタタキ目のある破片と出土する傾向があることからＡⅡ類タイプの時期、鎌倉中期から南北朝の時期に入る。このことから、この中世陶器の時期は南北朝頃としておきたい。

磁　器

磁器には舶載磁器と国産磁器がみられる。

舶載磁器：これには白磁埦、白磁皿・染付皿がある。

白磁埦（第21図２、３）

１は白磁の高台から底部下端の部分である。高台部は短かく付高台である。畳付の部分が平担で「U」字形に割り切った「割り高台」である。高台部は1.5cmの高さである。釉は乳白色で外面に貫入がみとめられる。みこみの部分に重ね焼きの跡がある。

白磁皿

口縁部が軽く外反し、口縁内面に花文が陰刻されている。釉の色は灰白色で比較的厚さはうすい。内外ともに貫入が認められるが、外面の方に細い貫入がみられる。

２は口縁部破片であり体部下端から口縁部にかけて内弯し口縁部は外反する。口縁の内側に花文が陰刻されている。釉は灰白色で内外ともに貫入が認められるが、外面の方に細い貫入が入る。３は底部から体部の破片である。底部からやや内弯して立ち上がり、体部から口縁にかけてわずかに外反する部分までである。高台部は付高台で比較的肉薄で垂直にのびる。畳付はややせまくなり水平である。釉は体部の内外面が灰白色で、底部外面が乳白色をしている。内外面とも貫入が認められるが、底部外面の貫入が粗い。２・３とも胎土は白色である。なお、土壙出土の１と堆積土出土の２・３は釉、貫入、胎土などから同一個体と思われる。

４は白磁皿の体部から口縁にかけての破片である。体部の上半で稜をもって広がり、口縁部は直立する。釉は乳白色で内外面に貫入が認められる。胎土は白色である。

染付皿

５は染付皿の底部破片である。文様はみこみの部分に比較的濃い青で草花文が描かれる。底部外面に青で二重の圏線の中に𠀋の一部と思われる文字が描かれる。

（磁器の年代）

白磁埦：高台から底部にかけての破片である。高台の畳付の部分が割高台になっている。この高台部の製作方法から中国産の白磁で明代中頃～後半と考えられる。

白磁皿：皿の破片は４点出土している。この中では器形、釉の色、貫入、胎土などからみて

同一体と思われる。口縁の形態から次の２種類がみられる。

１類:体部から内弯して立ち上り、高台が直立するもの、体部から口縁に外反する。

２類:口縁部と体部の境にわずかな稜があり、口縁部がわずかに立ち上るものである。

この特徴から、１、２類はいずれも中国産の白磁で明治後半と考えられる。

染付皿:みこみに濃いコバルトで草文を描いており、底部外面に[illegible]の右下の部分がみられることから中国産の染付で明治後半のものと考えられる。

日本産磁器

６は染付皿の口縁部破片である。体部が内弯して立ち上り口縁部が外反する。口縁土端がやや波状をしている。文様は青で外面に花文、内面に横線が描かれる。

（年代）

染付皿文様と描いたコバルトがうすく、口縁部形態は古伊万里の小皿に類似していることから16世紀後以後のものと思われる。

土師質土器

底部から体部にかけての破片である。底部外面に回転糸切離しの痕跡が認められる。

石　臼

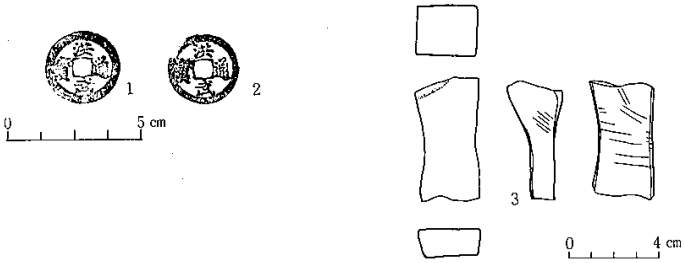
石臼はいずれも破片である。第23図１～６は上臼の破片で、第24図１～４は下臼の破片である。

上臼（第22図１～３）：１～３は側縁に立ち上りが認められ、４～６は縁がないものである。１～３には横にひき手の孔があり、４にはそそぎ口と下面に芯棒孔がある。使用痕としては５底面に溝がみられ１～４・６は底面に磨面が認められる。

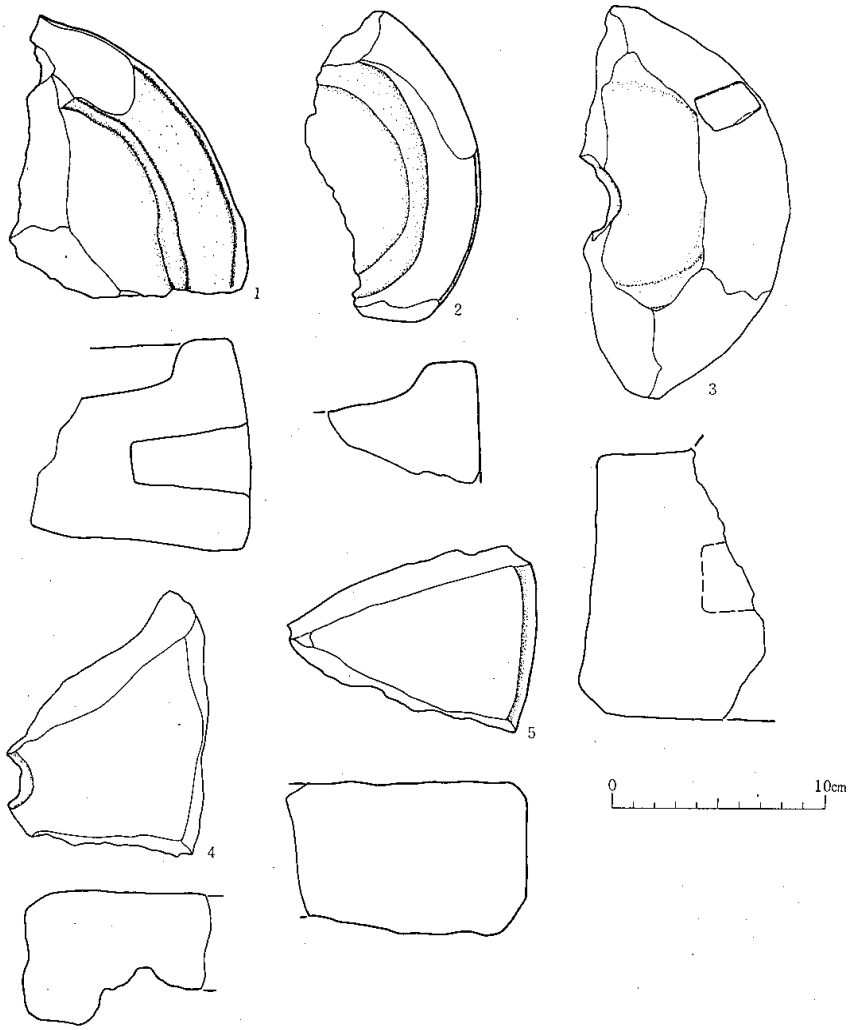
下臼の１～３は上面に放射状の目が刻まれた円形をした台部で、４は台部に受皿のつくものである。１に芯棒の孔の一部が残っている。

（石臼の年代）

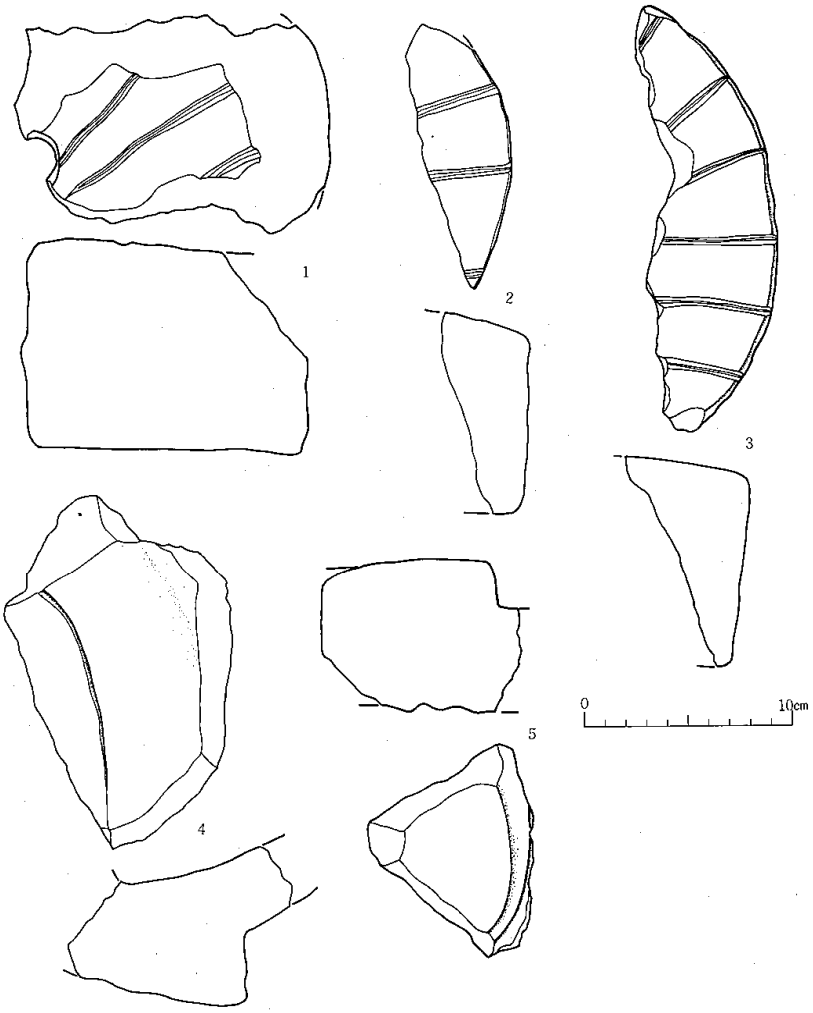
上臼には形態から縁のあるもの（Ⅰ類）と縁のないもの（Ⅱ類）がみられる。下臼には円形の台部だけのものと（Ⅰ類）と台部に受皿がつくもの（Ⅱ類）がある。出土状況から特に年



第24図　石製品



第24図　石製品



第25図　石製品

代を限定できない。しかし、このような特徴をもつ石臼は大和町の御所館、八谷館、福島県梁川城、山梨県の勝沼館、福井県の朝倉館などの中世城館からの出土例があり、15～16世紀に比定されるものが多い。特に年代は特定できないが15～16世紀としておきたい。

貨　幣

出土した貨幣は中国銭（洪武通宝）と寛永通宝である。洪武通宝の初鋳年は 1539年である。寛永通宝は銅製で裏に背文がみられないものであり、寛永13年～万治２年までの鋳られたものである。

キセル

出土しているのは「長ギセル」の雁首と吸口である。このような雁首に吸口がつく煙管が一般化するものはキセルが日本に渡来した慶長年間以後とされている。

Ⅳ．館跡について

１．遺構について

○形態と規模

遺構は掘立柱建物跡、土壙、ピット、通路（門、土橋状遺構、階段状通路）、溝、空堀などが発見された。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は主郭の上段平場と副郭の頂部平場で認められたが、全体の規模と間尺が判明した建物跡は副郭の１号掘立柱建物跡だけである。主郭の建物跡は南側（２・３号棟）と北側（４～６号棟）で重複して４棟みられたが１部分の調査のため平面形、規模は確認できなかった。

平面形：１号棟の平面形は桁行５間、梁間１巻の身舎で四面に庇（もしくは縁のつく）東西棟である。２～６号棟は東西棟（２・４号棟）・南北棟（３・５・６号棟）であることがわかるが平面形は不明である。

１号棟のような建物跡はその時期は15～16世紀前後とされるものが多い。

中世の同間面の例は蔵王町持長寺遺跡、仙台市鴻ノ巣遺跡、志波姫町宇南遺跡にみられる。

柱間寸法：１号棟の桁行は東側４間が1.8m、1.9m、西はじの１間が2.5mの長さで梁間は４ｍある。２～６号棟は部分的であるが桁行、梁間ともに1.6～1.8の間に入る。

県内において、中世～近世と考えられる建物は蔵王町持長寺遺跡（鎌倉末～室町）高清水町観音沢遺跡（鎌倉後期～室町前期）、志波姫町鶴の丸遺跡（中世～江戸）、築館町八沢遺跡（江戸）、八谷館（中世）、御所館（中世）などで確認されている。これらの遺跡の柱間寸法は中

世の建物跡で1.6～2.77mの巾でみられ、近世の建物跡で２m付近に集中する傾向が指摘されている。(1980、手塚、1978、小井川)、２・３・４・５号棟の桁行と梁間が1.6～1.9であることなどから中世とされるものの間尺範囲にあてはまる。長方形の身舎に四面庇のつく建物は八谷館・御所館などにも類例がある。また庇の妻にあたる部分に柱穴がみられる例もある。このことから平面プランや、間尺から中世にみられる建物跡と考えてもよいと思われる。

通　路（門跡）

（形態・規模）

形態は斜面を直線的に切り通した通路であり、内部施設として柱穴を伴なうものである。平面形は入口の幅が広く奥が狭い台形状をしている。

通路の規模と建物の規模は第２表に示した通りである。５号は削立されていないため本来の長さであるが、１・２・４号は入り口が１部削平されて本来の長さよりいくぶん短かいものと思われる。現状から約３mのもの（２・４号）と５m以上のもの（１・５号）がある。幅は上端幅とも様々であるが幅が2.5m以上のもの（１・２号）と２m以下のもの（３・５号）がある。

第２表　門跡計測表

門跡	上端幅	長さ	門の規模
1	4	1.4～2.4	A(2.1×1.5)・B(2.1×1.2)・C(1.6×1.7)・D(1.5×1.5)
2	3	1.6～2.1	2×1.2
3	(1.8)	(0.9)	1.2×(?)
4	2.7	0.8～1	0.9×0.9～1.1
5	1.4～1.8	1.2～1.4	1.2～1.3×1.5×1.7

この中で１・２・４・５号門跡の柱穴は配列状況から桁行１間、梁間１間の建物跡と考えられる。３号門は柱穴が２ヶ確認されているが、本来このような形であったか他の４ヶ所の門のような形態であったか不明である。

館の調査でこのような「切り通し」状の通路が、御所館、八谷館などにみられる。直線的な「切り通し」の形態は御所館の２号通路だけで他は直角に折れたり、弯曲したりするものであり、類例としては少ない。門の建物の形態としては、本柱を建ててその背面に控柱２本をおき、桁と梁でつなぎ、その上に切妻屋根をかけるいわゆる薬医門のようなものと思われる。

土　壙

土壙は３基確認されている。形態は１・２号土壙が楕円形で、３号土壙が長方形である。規模、深さはそれぞれ異なっている。

土橋状遺構

形態：１号土橋状遺構は掘り残し溝に直交してつくられ、２号土橋状遺構は４号溝の上に積土をしてつくられている。１号土橋は１号門の東にあり幅は1.5mのものである。２号土門の東

にあり、平面が台形状をしたもので幅は３ｍであり１号土橋より幅は広い。

溝

溝は主郭の中段平場（１～２号溝）通路状平場（４～６号溝）平担部１（７号溝）で確認されている。

形態規模：規模、深さ、形状はそれぞれ異なっている。

１～６号溝は平場の西側で平場を区画している。７号溝は斜面に構築されたこれらの配置状況をみると平担部１～３の西側にあり、副郭と主郭の裾部にむかって尾根を縦に掘られている。このような状況からみて、館の境界もしくは通路として使用されたものと思われる。

第3表　空堀計測表

掘　名	上　幅		深　さ	底面幅	形　状
1 号	2.2		4.4～5	9	平(箱堀)
2 号	尾　根 沢　部	4 3.8	2 1.5	1.8	V　字 平(箱堀)
3 号	4.5		2.5		皿　状
4 号	6		1.7		V　字

空　堀

空堀は６本確認されているが、いずれも部分的な調査であるため全体の規模については不明である。

調査区内での幅、深さ、断面形態は次の通りである。

規模は上幅が４～６ｍ、深さは1.5～1.7ｍである。断面形はＶ字形をした薬研掘、皿状をした毛抜掘、平担な面をした箱掘などと称されているものがみられる。規模、深さ、断面形はそれぞれ異なっている。２号空堀の北壁は整地層を壁としており、１・３・５号は地山を壁としている。

いずれも尾根を横に切る形態のものである。今回調査した空堀は主郭と副郭を区切る１号空堀、館を周囲の丘陵から区画する２・３・４号空堀である。

２．遺構の年代

遺物が出土してほぼ近い時期のわかる遺構は１号土壙である。他の遺構については時期を示す遺物が認められないため他の遺構との重複・切り合いなどから所属時期を考えてみたい。

土　壙

１号土壙の堆積土中から中国産の明代末の白磁皿が出土している。このことから１号土壙は15～16世紀頃の土壙と考えることができる。２・３号土壙では出土遺物はなく切り合いもないため時期については不明である。

掘立柱建物跡

時期のわかる遺物が遺構から出土していないため、いずれもその時期は明確でない。遺構の重複をみると２号棟～４号棟、５～６号棟が重複しており、２～３時期に分かれることが認められている。この中で上段平場の２・３・４号棟が土壙１と重複して、２・３号の柱穴が土壙より古い可能性があることで、巾はあるがこの３棟は土壙と前後する時期が考えられる。また５・６号棟については２～４号棟との間尺の類似が考えられることや平場から土壙出土の白磁皿と同一個体の破片が出ているため、２・３号と同じく土壙と前後する 15 末～16 中頃と考えておきたい。

門　跡

門跡は５ヶ所確認されている。１・３・４・５は切り通し状の通路の中にみられ、２号門は斜面の部分に位置する。出土遺物は出土しているが、２・３・４・５号通路から遺物は認められない。

１号門は柱穴の重複とその配置から、西側の重複した建物３棟（Ａ・Ｂ・Ｃ棟）と東側のＤ号棟の建物跡が考えられる。西側の建物は柱穴の切り合いからＡ棟が最も新しいといえ３回の建てかえが考えられ、$\frac{C}{B}$→Ａの関係が認められる。通路の堆積土は自然堆積土である。門の建て替えは認められるが、通路自体は新しい１号溝に伴なうものと考えられる。

２号門は土橋１の南側溝中に柱穴が２個認められる。階段状通路をもつ空堀によって切られている可能性もあり階段状通路より古い時期と考えられる。

３号門は建てかえは認められないが、門の堆積土は人為的に埋めてあり、上面が平担面となっていることで、１号溝や平担面を構築した時期よりも古い時期で２号溝と同じ時期と考えられる。

４号門は５号堀に通じまた、土橋状遺構とも連絡するものである。土橋状遺構が石臼が出土する３号溝より新しいことや、２号空堀の堆積土中から中世後半と考えられる石臼が出土している点で少なくとも中世末期の時期が考えられる。

５号門は沢に面した平担部から通じるもので、削平などは認められない。堆積土は自然流入であることで、通路状の新しい４号・５号溝と組合うことが考えられる。

以上のことから２号門、３号門は１号・４号門より古いと考えられる。その年代については１号門は 16 世紀頃で２・３号門はそれより古い 15 世紀と思われる。５号門は下段の新しい整地面に伴なうもので１号門と時期を同じくする。

土　橋

１号土橋は１号溝と２号溝を掘り残しているもので通路状平場と１号門を連結する状態にある。このことから１号溝と同時期の 16 世紀頃と考えられる。２号土橋は５号溝の上に積土され

て構築されているもので通路状平場と４号門を連結する状態にある。東側が下段平場の新しい時期の平場に伴なうことで５号溝より新しい 16 世紀後半末頃と考えられる。

溝

溝は８本検出されている１号溝の堆積土中から石臼が出土しており１号溝と５号溝は 16 世紀頃の時期が考えられる。他の溝と各遺構の新旧関係は第４表のようになる。

第４表　遺構の新旧関係

	旧	新
中　　段	３ 号 溝	→ １号溝 １号土橋
下　　段		４号門＝１号空堀
通路状平場	６ 号 溝	→ ２号土橋＝４号溝・５号溝
平 担 部 １	８ 号 溝	→ ７号溝 比較なし ３・４号堀切・１号土墨

空　堀

出土遺物は１号空堀の堆積土上面から寛永通宝が埋土上面から出土しているが、２・３・４号からの出土遺物はない。

他の遺構と関係から、１号空堀は底面に階段があって５号溝（中世末頃と考えられる）に連結していく。このことから通路状平場の新しい遺構群とほぼ同時期の天正以降～江戸初期と考えられる。２号空堀は下段平場や平担部１の整地層を切って構築していることで新しい遺構群に伴なう３・４号空堀は８号溝を切っていることから８号溝より新しい。

土　墨

積土などから出土遺物はみられないが、土墨積土下より８号溝が確認できることで８号溝より新しいといえる。また、３号空堀と同時期頃とも考えられる。

検出された遺構には重複や切り合いが認められた。これから各平場にある遺構の新旧関係は第 36 表のようになる。このことは遺構が同時存在するものではなくこれらの遺構の中で通路、門、土橋状遺構、溝の一部が各々の平場の移動、主郭と副郭の連絡でそれぞれが関係しあって機能するものである。この意味で各平場の中で相互の組合せで一連の遺構群として考えることができる。

これらの遺構は館全体での相互関係はつかめないが、主郭・副郭の平場ごとに遺構の新旧関係平場内で次のような①新しい時期の遺構群と②古い時期の遺構群が考えられる。これらの遺構群の年代についてみると新しい遺構群は１号土壙及び平場から中国産（明代後半）の白磁皿が１号溝・５号溝の堆積坏部から石臼が出土している。またこれらの遺物は 15～16 世紀以降に使用されたものと考えられていることからこの遺構群は 15～16 世紀頃と考えられる。

古い遺構は明確な遺物は出土していない。しかし、今回の調査で鎌倉後半～南北朝を含む時

期と考えられる中世陶器が平場整地層で出土しているので、幅はあるが①期以前の15 世紀前半までの時期としておきたい。

第５表　各遺構の関係

掘立柱建物跡・土壙

旧	新
２　号　門	→階段状通路
３　号　門	→１号溝
‖	
２　号　溝	
３　号　溝	→１号土橋
	→１号溝
	→４号門
	‖
	１号空堀
	４号門
	‖
６　号　溝	４号溝
	‖
	５号溝→２号土橋
	‖
	５号門
９　号　溝	１号溝
８　号　溝	‖
	３号堀切
	４号堀切

中段	１号溝＋１号門（A・B・C）＋１号土橋
	３号溝＋ピット＋２号門＋１号門（A・B・C）１１号橋
	２号溝＋１号門（D）
下段	空堀＋４号門＋２号土橋状遺構
副郭	６号溝＋階段状通路
副郭	５号門＋階段状通路
	５号門＋階段上通路＋４号溝

３．館跡の構造

立　地

館跡は東西を沢に囲まれた北東へ派生する丘陵基部に位置する。館の立地する丘陵基部は北と南を鞍部によって周囲の丘陵から分離された北東方向の丘陵とそれから西に派生した丘陵であり、その丘陵尾根は「冖」字状を示している。この丘陵頂部と沢に面した斜面を利用して構築している。館の立地する丘陵の北方２㎞には鶴田川が流れ、その流域には段丘と沖積地が広がっている。丘陵南側には狭い谷底平野がせまっており大森などの集落、丘陵北側裾には中里・上野沢の駒馬の集落が見られる。三本木町・大郷町・大衡村からの街道が鶴田川に沿ってみられ、駒場地区で交叉しており古くから交通の要衝であったと思われる。

範　囲

館の範囲は東西 330m×南北 120mの約 39,600 ㎡である。その範囲を区画する遺構として、北は東西方向の２号空堀、西は南北方向の土塁を伴なう空堀、南は東西方向の２・３号空堀がある。東側は主郭、副郭の斜面裾部に溝をめぐらしてその外側に平担部を配している。

このように区画された丘陵は中央の空堀によって主郭と副郭に別けられる。

配　置

今回の調査対象になった区域は主郭東側㊀の副郭の部分である。今回検出された遺構は館の遺構の１部分であるが、その調査結果から館の配置、構造をみてみたい。

平場の配置

（主郭）頂部の東西に長い平場（上段平場）を中心としてその周囲に平場をめぐらし、それぞれに遺構が観察される。上段平場の東側に東北に長い平場（中段平場）があり、その中段平場と上段平場の北・西・南側に一段低い平場（下段平場）が配される。中段平場の南隅に上段平場に続く通路がみられる。下段平場の北側と南側にある幅の広い平場は西側の土塁を伴なうせまい平場で連結している。

下段平場南西斜面部分には窪んだ通路状の遺構があり、その東と西に２～３段の平場（腰郭）がみられる。

中段平場の東側に１段低く西北に細長い平場（通路状平場）があり、主郭の平場と平担部を連続させ、また主郭と副郭を連絡する役割を果している。通路状平場の東側に斜面に面した半弓状の平担部が２段みられる（平担部１・２）

（副郭）頂部の楕円形状の平場（上段平場）があり、その周囲に２段の腰郭（腰部１・２）がめぐる。さらに腰郭２の西側斜面には西に張り出す三角形の細長い腰郭がみられる。また、腰郭２の東隅の下から南東にのびる尾根上にも三角形状の２段の平担面がある。

腰郭２の南隅から南にのびる尾根上には南北に長い土塁状の高まりとそれにそった溝が走る。

第６表　各郭の年代

		旧（14世紀後半～16世紀前半）	新（16世紀）
主郭	上段平場	ピット	土　壙
	中段平場	ピット ３号溝＋２号門＋１号門（D） ＋１号土橋	１号溝＋１号門（A・B・C） ２号溝　１号土橋状遺構
	下段平場		空堀＋４号門＋２号土橋状遺構
	通路状平場	６号溝＋階段状通路	５号溝＋階段状通路　４号溝 ５号門＋階段状通路
	区　画		１号
副郭	平　場		掘立柱建物跡 土　壙
	平担部１		溝６
区画		２号空堀　溝８	３号 ４号 } 空堀 １号土塁

遺構の配置

主郭・副郭の調査で検出された遺構は切り合いや重複が認められることで、各平場の遺構が同時存在するものでなく時期差があるものである。この遺構の新旧関係から２～３回の建て替えや改築が考えられ、各平場での新しい遺構群と古い遺構群に分けることができる。新・旧の遺構群が主郭・副郭で同時に共存していたわけでなく、同時には１つもしくは２つの遺構が各

平場に構築されていたものと思われる。

Ⅰ期と考えられる遺構群は各平場とも通路的要素をもった遺構が多く、Ⅱ期の遺構群は門を埋める。空堀を掘ることをしていることでⅠ期の遺構は平場相互の連続性があり、Ⅱ期の遺構は防御的性格をもちはじめたものと思われる。Ⅱ期と考えた遺構は各平場で共存したものでなくⅡ期の中でも時期差があると思われる。

Ⅴ．歴史的環境

駒場地区の中世の様子について記録などから概観してみたい。

文治５年（1189）９月源頼朝の奥州征伐後、陸奥国には葛西、伊沢、畠山、相馬などの東国武士が郡、郷、保の地頭職を与えられたとされる。

本遺跡周辺の地頭職を与えられた武士は『吾妻鏡』、『余目記録』（1541）などによると、黒川郡、志田郡に東胤頼が、黒川郡以北の河内五郡に渋谷、大掾、四方田、狩野の四氏が下向したとある。

鎌倉中期～後半にかけては、中央において北条氏と有力御家人の争いの結果、陸奥国の村々の多くが、北条氏の得宗領（北条執権直割領）に移った時に黒川郡内でも得宗御家人の村地頭支配が行なわれたものと考えられている。鎌倉時代～南北朝にかけて渋谷氏が黒川郡と志田郡を知行したことになっている。

建武以降～南北朝内乱期には『余目記録』や『伊達正統世次考』によると黒川郡内の所領は一定しなかったとある。

南北朝分裂後、大崎氏が河内（大崎平野）に移り、賀美郡伏見郷を中心に探提とし勢力をのばしていた。黒川郡について

明徳二年（1391）6 月 27 日付　『足利義満御教書』

『伊達正統世次考』明徳二年辛未

などから、探提大崎直持が畠山国詮の分郡である加美郡と足利氏によって与えられた恩償地である黒川郡に侵入した。このため『足利義満御教書』にみられるように室町幕府の返付命令を受けたが、そのまま両郡を押領しこれ以後黒川郡北部を大崎領に組み入れていく。この過程で北迫の地も大崎氏の影響を受けていたものと思われる。

その後、室町時代前半は『余目記録』などにみられるように大崎氏の一族と考えられる黒川氏がしだいに胎頭してきて、『伊達正統世次考』にみられるように、黒川氏は応永九年－伊達政宗（九世）の麾下に入り、その前後に郡中の渋谷氏、細川氏などが帰腹したとある。黒川郡を領国化していった。

天正十八年、秀吉の奥州仕置によって黒川氏が滅亡するとともに小谷館、長楯は廃絶されたものと考えられる。また、天正十八年の太閤検地の際に記された『黒川之内駒馬検地帳』や『黒川之内大森検地帳』があり、この中に名請人の名がみられる。これらの人々は以前に児玉氏と支配関係にあった人々であり、これらの人々を中心に村落が形成されていたと考えられている。中世末のこの地域を知るうえで貴重な資料となっている。

１．文　　献

a．館跡に関する江戸時代の記録と伝承

駒場村の館跡に関する初見は江戸時代（延宝年間）に編纂された『仙台領古城書上』にみられる次の記載である。

駒場村

一山　小屋城　東西三十八間、南北十間、城主兒玉右近・同苗惣九郎二代、天正年中迄居住。兒玉玄程會孫末孫玄安玄程。

その後、延宝年間編纂の『仙台領古城書立之覚』にも同様な記載がみられる。

駒場村

一山小屋城　　東西三十八間
　　南北十間

右城主兒玉右近同苗惣九郎ト申者二代天正年中迄居住之
由申傳候

駒場地区で本遺跡の他に館跡は知られていないところから本遺跡がこれに当るものと考えられてきた。

この二つの記録からみると規模は東西 38 間×南北 10 間C（約 70m×20m）であり、城主は児玉右近、惣九郎が二代にわたって天正年中まで居住したことになっている。

また、この館の館主に関した伝承として、『奥羽観跡聞老志』（田辺希文編）、『封内名跡誌』（田辺希文編）の「駒場村赤崎明神縁起」に次のような記載がある。

赤崎明神。　在二駒馬村一。

其地を千本椚と元。社人曰。神名帳に載る所。須岐神社山精の神社。行の神社。天足別の神社を以て。黒川の四社とす。赤崎明神は。卽須岐の神社是也と。然りといえども他の證なし。享保十九年甲寅七月。社人源左衛門某。赤崎明神の神體を神祇官卜部兼雄朝臣に謀って祭レ之。其祭神不レ詳。或曰。後鳥羽帝建久二年。兒玉彌太郎重成の建る所。是を赤崎明神と元。郷俗云。天正中兒玉右近某。同惣九郎某。小屋の城に住す。彌太郎重成は其祖ならんか。

これによれば赤崎明神は小屋城に住んでいた児玉右近の祖である児玉弥太郎重成によって、建久二年（1194）現在地に移された社であるとする伝承である。以上の２つの記録は江戸時代初期～中期にかけて記録されたものである。『仙台領古城書上』は伊達藩が駒場村の村役人に書き出させたものであることから、ある程度正確なものといえる。このことから延宝年間まで館の存在が何らかの形で残っていたものと思われる。また「赤崎明神縁起」から児玉氏が比較的古くからこの地に関係したことを伝承として伝えていたことを示す資料と考えられる。

また江戸時代の記録として

『仙台領古城書上』

大森村－中楯城　三十八間・十八間　城主児島安芸。天正年中迄五代居住。

『仙台領古城書立之覚』

大森村－ナカタテ城　東西三十五間、南北十八間　右城主児玉安芸ト申者天正年中迄五代罷在候

の記載がみられ、隣接する大森村のナカタテ城に児玉安芸が天正年間まで五代居住したとしている。この２つの城の児玉氏との関係は不明であるが、この記録は江戸初期のものであり、年代が比較的近いことから天正年間に鶴田川流域の大森、駒場周辺を両氏が支配していた可能性も考えられる。

ｂ．黒川郡北迫の中世の記録

鎌倉時代には黒川郡北迫に関係した記録は残っていない。南北朝に入った建武三年の文書が二通残っており、これから鎌倉期の様子がいくぶん知られる。

①　建武三年九月廿日付　　『足利尊氏下文写』

②　建武三年十一月九日付　『高師直施行状』

①の文書は三浦貞連が合戦で討死したため尊氏が貞連の遺族に陸奥国黒河郡南北迫の地頭職と伊予国宗麻庄地頭職を認めたものである。

②の文書は高師直が三浦四郎に黒河郡南迫の地頭職が認められたことを通達したものである。②の『高師直施行状』から、鎌倉時代に北迫の内に渋谷平四郎[注1]と児玉小太郎[注1]・同次郎が地頭職をもっていたことがわかる。

ここにみられる三氏の中で児玉・三浦両氏に関しての記録は残っていない。渋谷氏に関して『伊達正統世次考』などに断片的にその動きが見られる。

これによると、黒川氏が応永九年頃伊達政宗（九世）の支配に下る前後に黒川郡、郡中の渋谷氏、細川氏を帰服させたとある。その後、天正 15 年の中新田合戦の記録の中に黒川晴氏の叔父にあたる桑折城主渋谷相模の名前が見られる。

県史などではこのことから渋谷氏は黒川郡北迫の地から志田郡に分出し黒川氏との関係を深

めていったものとしている（加藤：1957）。

北迫の本館跡周辺に関係した記録からは中世を通して渋谷氏、児玉氏の動きがわずかに知られる程度である。この中で渋谷氏は志田郡に分出しておりこの地域に勢力はまったくなくなったようである。

建武三年の文書に見られる児玉氏は地頭職は持っていたが本地城に居住した記録はない。しかし、他の地域で関東御家人が鎌倉後半に陸奥国の地頭職をもっている村々にしだいに移住することがみられること、同族の四方田氏が加美郡に移住したと同様にこの児玉氏も鎌倉～室町にかけて北迫の地に移住した可能性は考えられる。

渋谷氏のような一族の分出は児玉氏にも考えられ、室町期を通じてさきにのべた大崎氏、黒川氏の影響を受けながらもこの地域に生活基盤をもち続けたものと考えられる。

註．1

この渋谷・児玉両氏は『吾妻鏡』や『余目記録』にみられる河内四頭の中の渋谷氏、四方田氏の同族と考えられている。渋谷氏は相模国渋谷庄を本拠とする武士であり、児玉氏は武蔵七党の１つで四方田氏と関係のある一族とされている。

２．館主について

館跡は調査の結果、新・旧の遺構が確認された。新しい遺構群の年代は 15～16 世紀間と考えることができ、古い遺構群については室町時代初め（1450 年代）頃までさかのぼる可能性が考えられた。しかし、現在のところ天正以前の館に関する記録、伝承は認められない。

鎌倉期の児玉氏と天正期に小屋城、ナカタテ城に居住したとされる児玉氏の関係は不明であるが、「赤崎明神縁起」にある児玉弥太郎重高が小屋城の児玉氏の祖にあたるとする記載とナカタテ城の児玉氏が天正年間まで五代居住したとする記録は児玉一族が比較的古くからこの地域に住みついた伝承と考えられる。

この意味では天正頃に駒場周辺では他の氏族の存在する可能性は少なく、伝承として伝わっている児玉氏を小屋城の館主とする可能性が考えられる。

204 足利尊氏下文寫 〔寶簡類聚〕

下文 （足利尊氏）（花押）

下　三浦因幡前司貞連跡

可令早領知、伊豫國宗藏本庄地頭職、陸奥國黒河郡内南北迫地頭職事

右、爲合戦討死之賞、所宛行也、任先例可致沙汰之狀如件

建武三年九月廿日

206 高師直施行狀 〔諸家系圖〕

陸奥國黒河郡内南迫由貞國、北迫淵谷平四郎、〔兒玉小太郎〕、同次郎五郎末跡地頭職事

任建武三年九月廿日御下文、可致沙汰付三浦因幡前司貞連跡之狀、依仰執達如件

建武三年十一月九日　武藏守　師直（花押）

三浦四郎入道殿

444 ※足利義滿御教書 〔伊達家文書〕

陸奥國積美郡事、畠山修理大夫國詮分郡也、而左京大夫抑留云々、縡絶常篇歟、同國黒河郡者、國詮恩賞之地也、同前、早伊達大膳大夫（宗遠）相共、在彼所、可被沙汰付國詮代、就彼左右爲有沙汰、可被注申之狀、依仰執達如件

明徳二年六月廿七日　（細川頼元）右京大夫（花押）

（満良）

苅西陸奥守殿

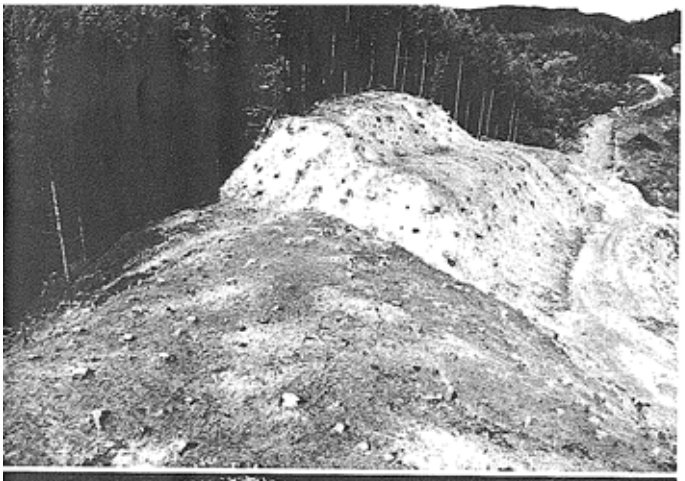
写　真　図　版

主郭・副郭
（発掘前）

主郭・副郭
（発掘後）

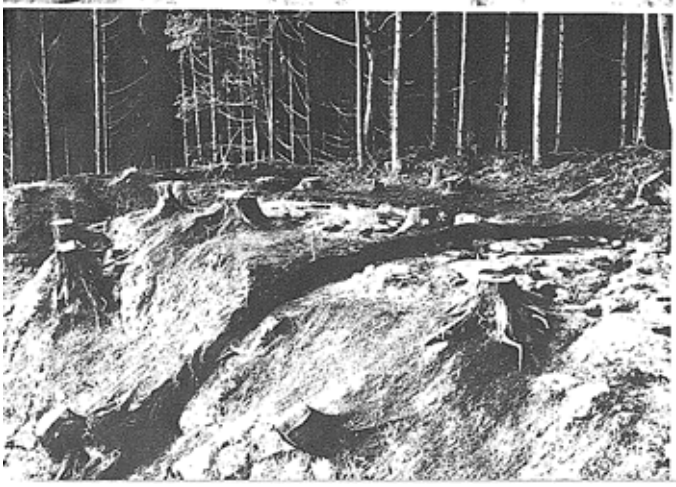
主郭（上・中・下段平場）
（発掘前）

図版２



主郭(上・中・通路状平場)
(発掘前)

主郭(上・中・通路状平場)
(発掘後)



上段平場
(柱穴群)

図版3

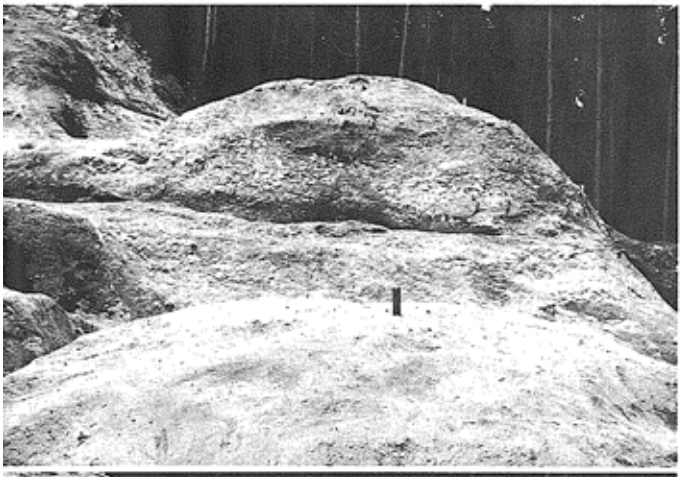
中段平場
（北側から）

通路１
（東側から）

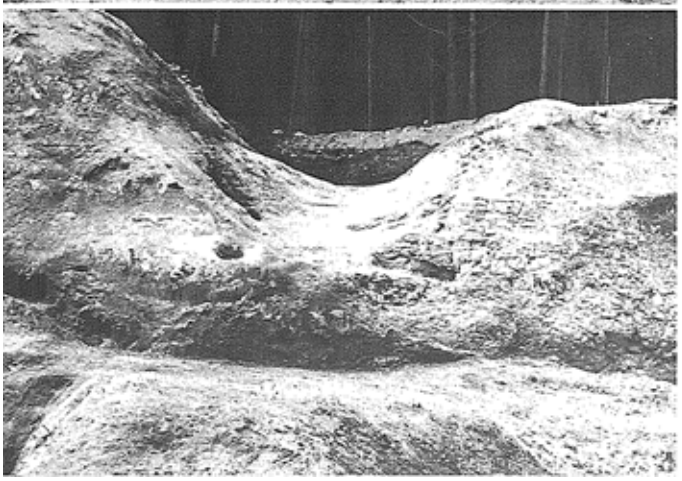
通路２
（南側より）

図版４

通路3
（東側から）



下段平場
（東側から）



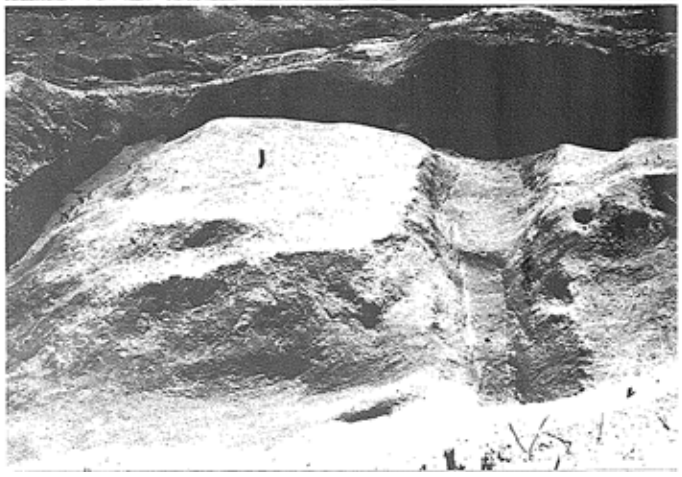
下段平場ー通路4
（東側から）

図版5

通路状平場・溝
（北側から）

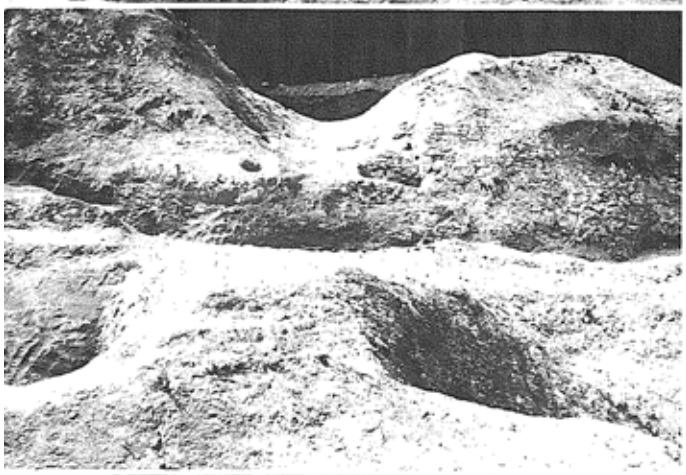
空堀と溝の
連結地点

通路状平場
北側平坦部



図版6

溝と土橋遺構



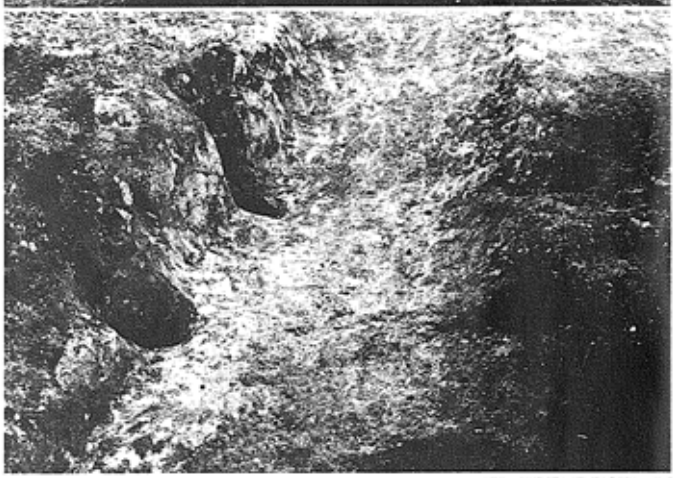
通路4と
土橋状遺構

空堀1号
（発掘前）

図版7

空堀1号と
通路5

通路5

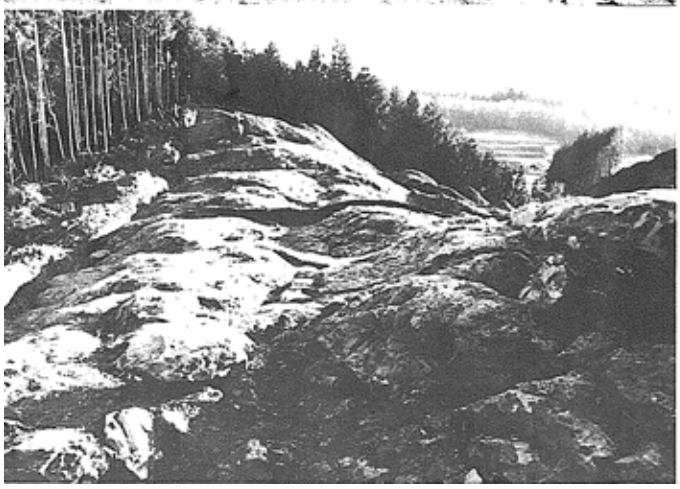


副郭
上段平場と腰郭
（発掘前）

図版8

副郭上段平場
（掘立柱建物跡）

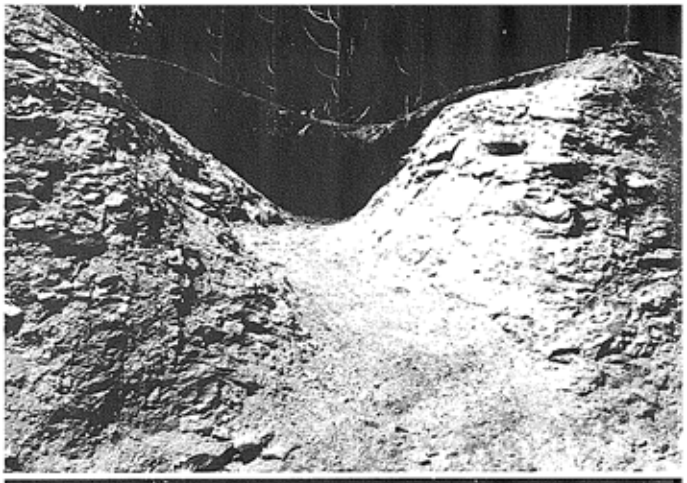
平坦部4
（発掘前）



平坦部4
（発掘後）

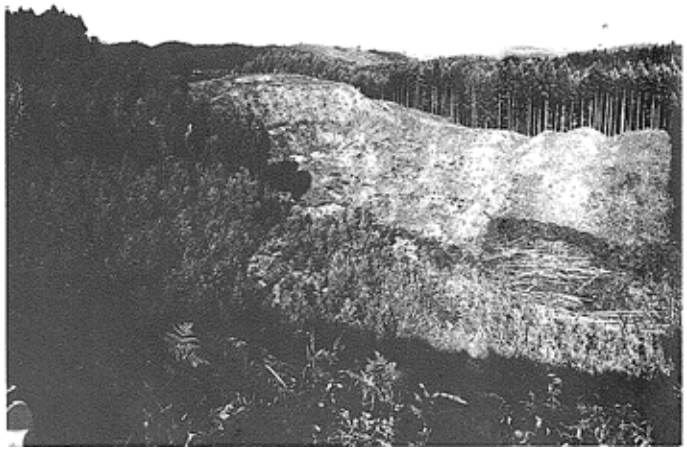
図版9

空堀2号



空堀3号

空堀4号・5号
遠景



図版10